

太平天国の湖南における進撃と地域社会

菊池 秀明

はじめに

近年の中国史研究における大きな変化は、新史料の発見によって歴史の具体像が明らかになった点であろう。とりわけ清朝政府の公文書である檔案史料の公開は、時代の要請に基づいた一面的な歴史認識の見直しを可能にした。太平天国運動（1850–64年）についても今こそ「革命の先駆者」あるいは「破壊者」といった従来の評価を超えて、客観的な立場からその実像を解明する必要が高まっている。

かつて筆者は太平天国の生まれた原因が広西移民社会のリーダーシップを握った科举エリートと非エリートの対立にあり¹⁾、清朝の統治が行きづまる中で人々は「理想なき時代」を乗り越える処方箋を熱望していたと述べた²⁾。また筆者は上帝会が慎重に準備を進め、各地の会員を糾合して金田団営を成功させたこと³⁾、永安州時代の太平天国は楊秀清のイニシアティブを強化しながら王朝体制のひな形を整え、広東信宜県の凌十八はその慎重な行動ゆえに太平軍と合流できなかったことを明らかにした⁴⁾。

さらに前稿は太平軍が広西北部を転戦し、湖南省道州を占領するまでの過程を分析した。そして①清朝側にとって太平軍の桂林攻撃は予想外であり、烏蘭泰の死による人材不足や士気の低さに苦しんだが、太平軍も兵力不足によって城の包囲を完成できず、イスラム教徒の協力にもかかわらず攻撃は失敗したこと、②太平軍が全州で虐殺を行ったという通説はフィクションで、守備隊は太平天国の不寛容な攻撃によって全滅したが、人々は理解を絶する凄惨な戦いに「王を殺された報復に住民を虐殺した」という解釈を与えたこと、③蓑衣渡の敗戦によって太平軍の北進計画は挫折したが、道州を占領して住民と信頼関係を築き、移民や他の反乱軍のメンバーなど数千名が参加したことを指摘した⁵⁾。

本稿は太平軍が道州に駐屯していた1852年7月頃から、長沙攻撃を開始した9月までの期間を取りあげる。この時期は引き続き太平天国が勢力を拡大し、全国的な運動へ発展する転機となった。とくに今回は19世紀前半の湖南で発生した諸事件に注目し、地域社会の変容と太平軍への反応という視点から分析を進めたい。

この時期の太平天国については簡又文氏⁶⁾、鍾文典氏⁷⁾の通史的著作と崔之清氏の軍事史研究⁸⁾がある。また宮崎市定氏と小島晋治氏は湖南における太平軍参加者の性質をめぐって論争を行い、小島氏はイギリスで発見した兵士の供述書をもとに分析を進めた⁹⁾。さらに目黒克彦氏は後の湘軍につながる団練の結成過程について論じ¹⁰⁾、最近谷家章子氏は新たな視

点から太平天国に呼応した反体制勢力の分析を試みた¹¹⁾。ただしこれらの研究も史料面では厳しい制約を負っていたと言わなければならない。

筆者は 1999 年から台北の故宮博物院を訪問し、同図書文献館所蔵の檔案史料を系統的に整理、分析した。また 2008 年、2009 年にはイギリスの National Archives を訪ね、いくつかの新史料を発見した。さらに中国第一歴史檔案館編『軍機処奏摺録副・農民運動類』および同館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』¹²⁾を併せ用いることで、この時期の太平天国の歴史を出来る限り具体的に描き出してみたい。それは太平天国史を階級闘争史の枠組みから解き放ち、新たな全体史を構築するための一階梯になると思われる。

1. 湖南における反体制組織の活動と太平天国

(a) 太平天国前夜の湖南における結拝兄弟、青蓮教と天徳王問題

まずは一つの史料を検討することから始めたい。光緒『郴州直隸州郷土志』には次のような記事がある。

咸豊二年三月十五日（1852 年 4 月 16 日）に土匪が乱を起こし、州牧の胡礼箴を殺害した。これより先に匪賊は楊柳鋪などに集まり、遙かに粵匪に呼応して、洪逆（洪秀全）に時期を尋ねたところ、逆匪は月餅を八枚半与えた。ところが月餅を持ち帰った者が途中で五枚食べてしまったため、ついに三月半だと勘違いをした。

その日の夜半になって、彼らは城に躍り込んだ。胡礼箴は警報を聞いて役所に入り、門で防ごうとしたが、力尽きて殺された。匪賊は城を占拠すること二日、外からの応援が続かず、郷勇が四方から集まったため、ついに散り散りになって逃げた。たまたま興寧県の桂知県が郴州にやってきて乱を鎮め、郷紳たちも賊を捕らえた。家々を搜索し、捕らえて処刑したため、残った匪賊は広西へ逃れた¹³⁾。

この史料は郴州で蜂起した劉代偉の反乱に関するものである。それによると劉代偉は太平天国に呼応しようと考え、蜂起すべき時期を洪秀全に問い合わせた。だが使者が期日を示す暗号の月餅を数枚食べてしまい、日付を間違えたために蜂起が失敗したという物語である。「八月十五日」の一斉蜂起を月餅に託して伝えるのは、元末の反モンゴル運動に関する故事に基づいており、史料の作者が太平天国と劉代偉反乱を異民族王朝の打倒をめざす漢人ナショナリズムの枠組みで理解したことをよく示している。

それでは実際はどうだろうか。檔案史料によると劉代偉は永興県人で、郴州と広東、広西のあいだを「往来遊蕩」していた。1851 年末に彼は郴州で廖揚星らと会い、いま広東の天地会は仁義会と名前を変え、「聞くところでは粵匪が滋事」しているので、これを結成すれば助け合えるだけでなく、チャンスがあれば略奪もできると話し合った。そこで 1852 年 1 月に彼らは 48 人を集め、劉代偉を大哥として結拝儀礼を行った。また彼は「金蘭記忠義

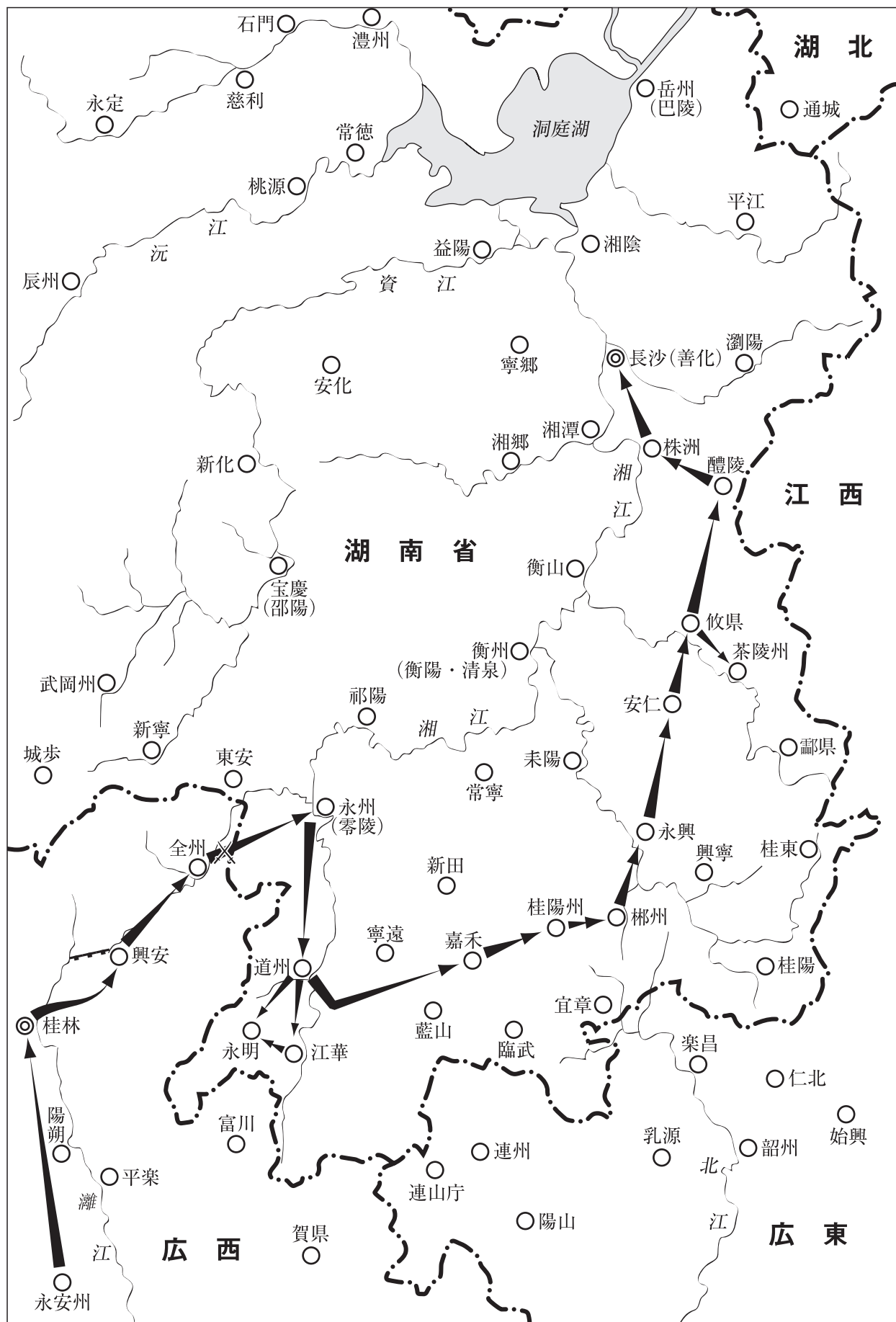


図1 太平天国時期の湖南

堂」と印刷した太極図の門牌や「洪英の真主は人に知られず」といった歌訣（詩）、「太子太保兵部尚書」と刻んだ印鑑などを作成した。

彼らの活動に気づいた署知州の胡礼箴は張老五ら7名を逮捕し、張老五は獄中で病死した。たまたま兵餉が郴州に到着し、3,000両が州庫に保存された。「銀数は巨万を超える」という噂を聞いた劉代偉は、報復のついでにこれを強奪しようと考えた。そこで彼は300名を集め、豪雨に紛れて郴州城に夜襲をかけ、胡礼箴を殺して仲間を救出した。また彼らは兵餉など3,600両余りを奪い、清軍兵勇の追撃を受けると油榨墟などに退いた。

ここで劉代偉は蜂起を決意し、「明命元年」と記した旗を立てて道すがら人々に参加を迫った。また奪った銀を携えた部下を広東、広西へ派遣して「粵匪を勾結」しようと図り、水かさの増した耒水（河川名）を下って一気に衡州を攻めようとした。だが清軍および団練の攻撃を受けると、反乱軍は敗北して劉代偉は殺されたという¹⁴⁾。

汪堃『盾鼻随聞録』によれば、この時劉代偉の残党であった李巖通ら300名が太平軍に投じ、道案内役を買って出たとある¹⁵⁾。郴州は永安州で捕らえられた洪大全（本名焦玉昌）の故郷で、1854年に彼の弟だった焦三、妻の許月桂らが蜂起したため、崔之清氏はこれを史実と見なしている¹⁶⁾。だが檔案史料は反乱軍のうち300名以上が殺されるか捕らえられ、劉代偉と結拜したメンバーで逃走出来たのは4名のみと報じており、その数を過大には評価できない¹⁷⁾。また彼らが広東、広西の反乱勢力と連携しようと試みたのは事実だが、ここであいう「粵匪」とは必ずしも太平天国をさす訳ではなかった。

次に太平天国前夜の湖南における反体制的組織の活動について考えたい。【表1】は道光年間から咸豊初年の湖南で摘発された事例をまとめたものである。これを見ると天地会のベースとなった結拜兄弟は、[a]の永明県、[b]の靖州、[c]の桂東県、[h]の醴陵県、[i]の道州、[j]の零陵県、[l]の祁陽県、[n]の臨武県、[p]の新寧県など広範に展開していたことがわかる。むろん別書で指摘したように、元々相互扶助組織であった天地会は系譜関係が曖昧であり、嘉慶年間に厳しい弾圧が加えられたために、人々は天地会の名称や組織形態を避けるようになった。表中でも「天地会を復興した」と判断されたのは[d]の張擗ら、[r]の劉輻節らの2例に過ぎなかった。

代わって登場したのは様々な会名であり、表では[d]の三合会、[h]の認異会、[i]の義気会、[i]の了叉会、[o]の棒棒会、[p]の把子会、[q][r]の尚弟会、[u]の沙包会などが見られた。そのうち三合会、尚弟会は劉代偉の仁義会と同じく「天地会の変名」であることを自覚していたが、その他は適宜つけられたケースが多く、乞食会あるいは乞食のリーダー（杖頭）を意味する沙包会、了叉会などの例もあった。また処罰を恐れて会名を設けなかった事例のうち、[a]の龔大、[c]の薛義による組織は刀の下をくぐる「過関」の儀礼など天地会の影響を窺わせるが、それは張擗の三合会と比べた時に部分的な模倣に止まった。むしろ[h]の認異会のように白昼に窃盗を行う紅門、夜間に盗みを働く黒門など、活動内容によって新たに組織を整えた例も見られた。総じて言えば湖南における天地会の影響は、かつて言

表1 道光年間～咸豊初年の湖南における結拝兄弟と民間宗教

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
a	道光6年 (1826)	永明県	<p>◎永明県で小商売を営んでいた龔大(江華県人)は、蔡小蕙(江華県人)、謝鬼鉄(寧遠県人)、杜八喜(零陵県人)、謝老四(宝慶府人)らと「孤単」について語り、仁義会を結成して「何かあれば互いに幫助する」ことにした。彼らは59名を集め、銭数十から200文を出し合い、6月に永明、江華県と道州の境にある上江墟で結拝儀礼を行った。</p> <p>龔大は自ら大哥を名乗り、人々に神前で拝ませた後、交叉した刀の下をくぐる「過関」の儀礼を行った。また「一夜把柄一夜光、撥開鳥雲過東方、有忠有義常常過、無忠無義劍下亡」という歌訣を伝授した。参加者がその意味を尋ねると、龔大は「兄弟たちに同心幫助させ、他人の欺侮を免れるためで、他意はない」と答えた。</p> <p>この事実を聞きつけた江華県知県熊飛は、永明県、道州と協力して弾圧に向かった。差役の李錫らが仕事を探すために廟内に残っていた張跳らを捕らえようとすると、張跳らは抵抗し、李錫らを負傷させて逃走した。やがて龔大らは捕らえられたが、「実に孤独で寄る辺がなく、他人から欺かれるのを恐れ、結拝することで互いに助け合おうとした」のであり、反逆の意志はなかったと主張した。巡撫康紹鏞は異姓結拝の例に従って龔大を絞首刑とした。</p>	『康紹鏞奏稿』巻5および軍機処檔059044号。
b	道光8年 (1828)	靖 州	<p>◎靖州で仕事を探していた金玉魁(貴州開泰県人)は、1823年に貴州で拝会した経験を持つ許老九から結拝兄弟を勧められ、「無処覓工、貧苦難度」を理由に胡光散ら52名を集めて拝会することにした。だが多くの者は銭300文を出すことを惜しみ、2度にわたり集会は延期となった。</p> <p>5月に金玉魁ら46名は界排庵に集まり、年長の陸潮興を大哥として結拝儀礼を行なったが、罪が重くなる「歃血焚表」の儀式や会名を立てることはしなかった。金玉魁は皆から集めた金の残り6,700文を許老九と分けた。また5月に盧大漬の父が死去すると、金玉魁らは丁玉高らと相談して銭5,000文を集め、葬式の費用として盧大漬に与えた。</p> <p>捜査が始まって捕らえられた金玉魁は、「実に金をだまし取り、互いに助け合おうとした」のであり、他に不法行為はしていないと供述した。巡撫康紹鏞は異姓結拝の例に従って金玉魁を絞首刑、残り34名を流刑などにした。また真剣な捜査を行わなかった靖州知州魏徳晩も処罰を受けた。</p>	『康紹鏞奏稿』巻7および秘密結社項8894-21号。
c	道光9年 (1829)	桂東県	<p>◎交易のため桂東県に至った薛義(広東樂昌県人)は、張石義(桂東県人)、李鉄牛(連州人)と「貧苦」について語り、結拝兄弟をして助け合い、併せて「金をだまし取って使用」しようと考えた。彼らは60名を集め、それぞれ銭360文を出させて、5月に大塘山で結拝儀礼を行った。</p> <p>薛義は刀下をくぐる儀礼を行った後、「不忠不義照鶏亡」といった歌訣を伝え、仲間を見分けるための髪型や合言葉を教えた。また「忠心義氣、共同和合、結万爲記」と印刷した布を別に金を出した者に与え、困った時に助け合うための目印にした。集めた金は薛義ら3人で分けた。</p>	『康紹鏞奏稿』巻7および秘密結社項8894-22号。

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			捜査が始まると、捕らえられた張石義は会名、会簿は設けておらず、反逆を図ったのではないと主張した。張石義らは異姓結拝の罪で辺境へ流刑となった。	
d	道光 11 年 (1831)	藍山県	<p>◎張擲(広東番禺県人)は 1830 年に樂昌県で范孝友(英徳県人)と会い、広東の天地会は三合会と名前を変えたが、何かあれば助けが得られ、人数に恃んで強奪も可能と聞いた。また范孝友は「開口不離本、出手不離三」の口訣や過関の儀礼などを伝授し、結会の歌訣を取り出した。</p> <p>そこには長房の蔡德忠が福建に、二房の方大洪が広東に、三房の馬超興が広西に、四房の李色開が江南に、五房の胡德地が山東にいと記されていた。また後五房の名前や「紅旗飄飄、英雄尽招、海外天子、來復明朝」などとあった。張擲が蔡德忠らの所在について尋ねたところ、范孝友は遠い昔のことでわからないと答えた。張擲はこの歌訣を借りたが、再び范孝友と会うことはなかった。</p> <p>1830 年に張擲は藍山県へ移住し、31 年 3 月に李金保(宜章県人)ら 3 人と錢 6-700 文を出し、張擲を大哥として結拝儀礼を行った。その後李金保は封上輝と 3 度にわたり、72 名を集めて結拝儀礼を行った。またそのメンバーだった蕭紅保は広西富川県で王姓から三合会の歌訣を与えられた。</p> <p>この年貴州で三合会が摘発されると、湖南でも捜査が行われて張擲らは捕らえられた。李金保は女性関係のもつれから仲間の 1 人を殺し、広西宜山県まで逃げたところを捕らえられた。さらに藍山県生員の黃河は蕭紅保の所持していた三合会の歌訣を押収した。</p> <p>取り調べに対して張擲は、結拝の目的は反逆ではなく、メンバーの多くが文盲のため歌訣の内容を教えていないと主張した。だが巡撫吳榮光は彼が三合会と天地会の関係を知りながら、結拝儀礼を行ったのは「復興天地会」の罪に当たるとして斬刑に処した。また李金保も死刑になった。</p>	『石雲山人文集』巻 3 および『天地会』7、506・512 頁。
e	道光 14 年 (1834)	邵陽県 城歩県 武岡州 な ど	<p>◎劉祥安は邵陽県人で、大乘教徒の劉偕相(衡陽県人)から「茹素念經」すれば病気を却け、福を招くことが出来ると勧められた。彼は劉偕相を師と仰ぎ、錢 120 文を出して「普林」なる法名と『大乘經』を与えられた。また自らも『禪門集要十王經』などを購入し、家で読經した。</p> <p>蔣大拔、劉正管は城歩県人で、同県の生員だった張夫覚、饒愈叙と共に道士の唐先文(邵陽県人)を拝して大乘教を学び、中に「無生老母」と記された『鈔本二才勸善經』や歌詞などを与えられた。また「坐功運氣」の術を伝授され、無生老母の位牌を作って読經するように命じられた。</p> <p>さらに武岡州人の唐老発、邵陽県人の唐站和、城歩県人の陶潮澤、新寧県人の藍進迪ら 15 名は、両親や自分が病気のために「消災祈福」を願い、自宅で毎月二度「喫齋」を行ったが、師を拝んだり「習教伝徒」はしなかった。</p> <p>劉祥安、蔣大拔らは無生老母を拝み、また經卷を所蔵した罪で辺境へ流刑となった。また張夫覚らの生員資格も剥奪された。唐老発らは「拝師習教」していないため、共に杖八十の刑となった。</p>	秘密結社項 8875-19 号。

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
f	道光 15 年 (1835)	武岡州	<p>◎王又名(四川成都府人)は「算命」のため武岡州へ至り、程孔固(武岡州人)と会って青蓮教(金丹大道)を伝えた。王又名は「坐功運氣」をすれば病気を避け、仏や仙人になれると説いた。程孔固が彼を師と拝んで「食長齋(菜食主義)」を誓うと、無生老母を拝むように教えられた。また程孔固は王又名と四川へ行き、『龍華經』と坎卦図章を与えられた。</p> <p>帰宅した程孔固は紅紙で無生老母の位牌を作り、人々に「喫齋念經」するように勧めた。彼の息子である程恒忠、潘明德(武岡州人)、武岡州に住んでいた新寧県人の雷倡和ら 50 余名が入信し、錢 320 文を出して「もし開華(なまぐさを食うこと)したら、永遠に地獄へ堕ちる」という誓いを立てた。程孔固は彼らに無生老母の位牌や經文を授け、毎日運氣や読經を行って「過惡を懺悔」させた。また仏の誕生日には程孔固の家で龍華会が開かれ、潘明德らは香資錢を持って参集した。さらに病気で運氣ができない潘十九には「閉目靜坐」して無生老母を拝むように命じた。</p> <p>5 月に程孔固は広西へ布教に出かけ、7 月にヤオ族生員だった藍正樽(新寧県人)は雷倡和に従って入信した。12 月に武岡州で青蓮教が摘発され、程恒忠、潘明德らは捕らえられた。また弾圧の手が及ぶことを恐れた藍正樽は「仁義の言に仮託して時事を詆毀」した『王政本子』30 条を作成し、1836 年 3 月に「剛健」の年号を立てて武岡州城を襲撃した。</p> <p>藍正樽反乱の鎮圧後、反乱計画と無関係であったことが確認された程恒忠らは、「白陽、八卦などの邪教を伝習」した罪によって辺境に送られ奴隷とされた。</p>	秘密結社項 8841-37 号。および軍機処檔 070824 号。
g	道光 17 年 (1837)	永順県	<p>◎韓子蘭(鳳凰廳人)は火居道士で、同じく道士だった父から伝えられた經卷を学び、人に乞われて「念經建醮、看地葬墳」したが貧しかった。そこで經卷や符本、木剣を持って外へ出かけ、「邪疫を驅除出来る」と宣伝した。11 月に永順県に至ると、知り合いの熊文政が妻を病気で亡くしたため、家で「念經超薦」してくれるように頼んだ。</p> <p>ところが熊文政の隣人だった龔榮富は読經の声を聞き、金をめぐるトラブルの腹いせに「邪教を匿い、邪書を所蔵している」と保甲の龔榮仁に訴えた。通報を受けた外委邢正倫は、張応敷の家で「念經」していた韓子蘭を捕らえ、經卷を押収した。尋問の結果、韓子蘭は「異端邪術」で人を治療した罪で労役刑となった。</p>	『宮中檔道光朝奏摺』3、756 頁。
h	道光 19 年 (1839)	醴陵県	<p>◎陶瞎子(寧郷県人)は 1826 年に湘潭県で窃盜事件を起こし、永興県で労役刑に服した後に醴陵県へ至った。彼は陳盪桶らと会って「窮苦孤單」について語り、助け合って窃盜を働くために結拜兄弟を行うことにした。彼らは 44 名を集め、2 月に 200 文ずつ持ち寄って天后廟裏で儀礼を行った。</p> <p>彼らは関帝の位牌を置き、陶瞎子を大哥として「跪拜」した。また会名を認異会とし、白昼に窃盜を行う紅門、夜間に盗みを働く黒門を置き、河川で活動する二門、陸上で行動する三門を設けた。さらに「近隣二十里以内では盗みを行わず、放火や強盜、酒に酔ったり姦淫することを禁止」する規約を作り、違反者には罰金か除名処分が科せられた。</p> <p>3 月に会員の陳細六らは湘潭県の河川で胡樂林の船</p>	『宮中檔道光朝奏摺』6、498 頁および 7、343 頁。

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			から銀や衣服を盗んだ。捜索が始まると陶瞎子らは捕らえられ、結拜後に余罪はなかったものの、陳細六など会員の多くが窃盗歴を持っていることが明らかになった。陶瞎子は「異姓人結拜弟兄」の罪で絞首刑となり、処刑に先立って額に「拝盟匪犯」の文字を焼き付けた。また陳蓋桶、陳細六らも辺境へ流刑となった。	
i	道光 19 年 (1839)	道 州	◎朱亮亮は李洗斗、蔣玉苟ら 53 人と道州把截山の廟内で結拜兄弟を行い、朱亮亮を大哥として義気会を設立した。朱亮亮らは 1838 年から 1840 年にかけて道州、寧遠県で強盗や放火をくり返し、張万輻らも家が被害に遭った。また張周氏らが強姦された。蔣玉苟も雑貨店を経営する謝大興に訴えられたのを恨み、1839 年に 17 人を集めて謝大興の家を襲って財産を奪い、妻の秦氏などを強姦した。	秘密結社項 8889-12 号および『宮中檔道光朝奏摺』7、234 頁。
j	道光 20 年 (1840)	零陵県 東安県	◎黄来発は 22 名を集め、零陵県の花橋で結拜儀礼を行い、了叉会と名づけた。四房に分かれ、名目は「乞丐(乞食)」だが、実際は盗賊だった。了叉者は乞丐の「杖頭」で、それぞれの房を率いて暗号を作った。 黄来発は東安県で殺害事件を起こし、三房の陽定容らも強盗殺人を働いていた。また大房の趙瞎子、二房の周鴻汝は別に数十名ずつ仲間を集め、別に結拜儀礼を行った。	秘密結社項 8889-12 号および『宮中檔道光朝奏摺』7、234 頁。
k	道光 25 年 (1845)	善化県 湘潭県 な ど	◎ 1827 年に摘発を受けた青蓮教は、1842 年に李一源、陳文海が中心となって復興運動を進め、警戒の厳しい四川を離れて湖南善化県東茅巷に至った。ここで劉瑛(江寧人)が入教すると、古参幹部の彭超凡は彼に「設壇請乩」の降神儀礼を行うように依頼し、信徒の命名に使う「十七字派」を設けて各省で布教を行った。 これら主流派の復興運動と並んで、周位掄(湖南清泉県人)、郭建汝(後の劉儀順、湖南宝慶府人)による分派の動きも盛んとなった。周位掄は 1838 年から独自に江西、湖北、湖南で布教を行ったが、青蓮教に「飭令万雲龍」の文字を加えるなど天地会の要素を加え、坐功運氣の術を授けた。また 1823 年には湖北漢口で黙想を行い、「世人の遭劫を知り」「妖魔を除くことが出来る」と唱えた。郭建汝は周位掄を弥勒仏の生まれ変わりであるとして教主に立てた。 これを知った李一源らは、1844 年 2 月に湖北漢陽で「紫微壇」なる降神儀礼の壇を設け、朱中立(即ち朱明先、湖南長沙人)を立てて教主とした。また各省の幹部を確定し、陝西や甘肅、広西、江南、山東にも布教した。排斥を受けた周位掄らは金丹道と名前を変え、青蓮教を「邪魔外道」と批判して湖南一帯で活動した。また郭建汝は四川に戻って劉儀順を名乗り、「天下は久しからず大乱となる」と唱えて灯花教を創立した。この灯花教は貴州、湖北で勢力を伸ばし、太平天国期に号軍蜂起などの諸反乱を起こした。 1845 年に青蓮教は再び摘発され、湖南布教の中心人物だった張致讓(善化県人)など多くの信徒が捕らえられた。	莊吉発「清代青蓮教的發展」『大陸雜誌』71-5 期。秦宝琦『中国地下社会』2、374 頁。
1	道光 26 年 (1846)	祁陽県 零陵県 寧遠県	◎王棕猷は零陵県人で、1845 年末に魏世培(監生)ら 73 名を集めて祁陽、零陵両県境の花橋で結拜儀礼を行った。同じ頃寧遠県人の魏珍選も李有俊(監生)、張開皓(職員)ら 35 名で結拜儀礼を行った。この年新田県で楊輝祖の組織が摘発され、北京の都察院に魏珍選	『宮中檔道光朝奏摺』18、595 頁。

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			<p>らが「結会謀叛」を企んでいるとの告発がなされると、二つの事件の捜索が始まった。</p> <p>まず寧遠県で張開皓が捕らえられると、魏珍選は40名余りで県城へ押しかけ、張開皓を釈放させようとした。彼らは城外に至り、「張開皓を釈放しなければ入城して奪い取るぞ」と叫んだが、知県曹源は兵役に命じて魏珍選らを捕らえさせた。魏珍選は結拜兄弟の罪で絞首刑となった。</p> <p>また王棕猷の捜査によって逮捕された唐有詩は、「王棕猷の別名は万雲龍で、匪党を糾合して花橋、四明山に集まっている」と供述した。王棕猷は張春元(武生)の家に匿まわれていたが、捜索が厳しいのを知って「人々を集めて抵抗」しようと考えた。そこで李美能を寧遠県城に偵察に派遣したが、逆に捕らえられてしまった。</p> <p>王棕猷は仲間80余名を文明市に集め、福建、江西会館に立てこもった。兵役と文明市の段康侯(武生)が率いる郷民が攻撃をかけると、王棕猷らは数名を負傷させたが、14名が殺され、残りの者も捕らえられた。王棕猷は死刑となり、魏世培と李有俊は監生資格を失って辺境へ流刑となった。また張開皓と張春元もそれぞれ処罰を受けた。</p>	
m	道光26年 (1846)	新田県	<p>◎楊輝祖は新田県人で、1845年末に劉華蛟(監生)、病気のため「喫齋念経」していた王輻珍(武生)、劉逢一(武生)、文繼旭(捐納)、蕭掄沅(生員)、陸振衡(武生)、劉紹先(武生)らと結拜兄弟を行うことにした。46年1月に陸振衡、劉紹先らは欠席したが、51名が瓦屋園に集まり、楊輝祖を大哥として結拜儀礼を行った。楊輝祖は「東西南北」の文字を刻んだ「碼子」を作成し、何かあればこれを用いて仲間に伝えることにした。彼らは神の位牌の前で血の入った酒を飲み、参加者のリストを焼いて散会した。</p> <p>この時族人の陸廷鰲が参加したことを知った陸廷錫らは、自分たちに罪が及ぶことを恐れて王輻珍らの「喫齋念経」の事実と共に都察院へ訴えた。また陸振衡、劉紹先らが自首すると、楊輝祖は捕らえられ、仲間だった楊大義の家からは大量の硝黄が発見された。このため彼らに謀叛の疑いがかったが、楊輝祖らはこれを否認し、楊大義の雇い主が給料を払えず、代わりに与えたものだと言った。</p> <p>結局楊輝祖は絞首刑となり、劉華蛟らは監生、生員などの資格を取り消されて流刑になった。また陸振衡、劉紹先も生員資格を剥奪された。</p>	『宮中檔道光朝奏摺』19、9頁。
n	道光27年 (1847)	臨武県 常寧県	<p>◎張老二は湘潭県人で、広東から臨武県へ至り、拳術を演じて生計を立てていた。彼は唐輻通に広東望海山で一人の僧侶から排会結盟を学んだと告げ、「奉天安民、興復明室」と記した字帖を見せた。そこで二人は「習教」の罪で送られた流刑地から逃亡した郭志祿(常寧県人)ら60人を集め、張老二を大哥として結拜儀礼を行った。</p> <p>その後唐輻通らは付近の牛頭汾、宜章県泗溪にある塩埠が豊かと聞き、仲間の唐大旺を派遣して恐喝させたが捕らえられた。また郭志祿は常寧県に戻り、みづから40名余りを集めて結拜儀礼を行ったが、まもなく捕らえられた。</p>	『宮中檔道光朝奏摺』20、202頁。 秘密結社項 8889-15号

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			<p>なお 1848 年に金丹教徒の董言台(江西南康県人)がイギリスと広東人の「民夷」衝突事件をきっかけに騒動を起こそうとして捕らえられると、彼と「湖南教匪」の蔣万成は唐軻通に従って結拝儀礼を行ったと供述した。</p>	
o	道光 27 年 (1847)	新寧県 道 州 全 州	<p>◎雷再浩は新寧県のヤオ族で、李世徳(広西全州人)と付き合いがあり、それぞれ「茹素邀福(菜食)」していた。8 月に雷再浩は李輝(新寧県人)ら 55 人と「棒会」を結拝した。李世徳も全州で結拝を行い、2 人は相談して互いに助け合うことにした。会内には「喫齋」する者が多かったため、これを行う者を「青教」、行わない者を「紅教」に分け、全体を棒棒会と名乗ることにした。</p> <p>雷再浩らは会員に「関口渡牌牒」の五字を記し、「保和宝堂」の印を押した布を与えて暗号とした。また人々に「近く刀兵の劫がある。入会すればこの危機を乗り越えられる」と唱え、ニワトリの血を入れた酒を飲んで誓う「拝台」の儀礼を行った。人々は雷再浩と李世徳を総大哥として従った。</p> <p>9 月に署新寧県知県李博の取締りを受けて陳名機らが捕らえられると、雷再浩は 10 月 26 日に蜂起する準備を進めた。だが清軍と江忠源(挙人)の率いる団練に機先を制され、雷再浩の家が搜索を受けて『大乘教』を押収された。雷再浩は全州へ逃れ、李世徳と会衆 1000 名を紅、黒、藍、白、黄旗の 5 軍に編制して蜂起した。</p> <p>いっぽう 10 月に道州で李魔湾(本名李木黄)が結拝兄弟を行った。彼は永明県で楊祥らと「拝会」した罪で福建へ流刑となったが、逃亡して道州で潜伏していた。李魔湾は李士憲(生員)ら 32 名と結拝儀礼を行い、李魔湾を大哥としたが、11 月に仲間の劉沅濤が捕らえられて搜索が始まった。李魔湾らは知らせを受けて逃亡しようとした。</p> <p>このとき以前から知り合いの雷再浩から手紙が届き、李魔湾に人々を集めて広西へ向かい、蜂起を助けるように依頼された。李魔湾は李士憲と相談し、12 月 3 日に広西へ向かったが、道州の長樂地方で捕らえられた。また 11 月に李世徳は戦死し、雷再浩も江忠源の計略によって投降した「頭目」の陳先進らによって捕らえられた。</p> <p>雷再浩と李輝は「謀反大逆」の罪で凌遲処死となり、李魔湾も謀反の罪で斬首となった。</p>	道光『宝慶府志』巻 7 および軍機処檔 081087 号、 081094 号。
p	道光 29 年 (1849)	新寧県	<p>◎李沅発(新寧県人)は「在外遊蕩」の生活を送っていた。この年旱魃のため米価が高騰すると、金持ちは米を売り惜しみ、また収穫後に貧民から利息を貪った。そこで李沅発は謝有興らと把子会を作り、結拝兄弟を行って人数を集め、彼らから略奪を行おうと考えた。しかし仲間の楊倡実、李世英が逮捕されると、12 月に 300 名で新寧県城を襲撃した。</p> <p>李沅発は知県万鼎恩および前署知県李博の家族を殺害すると、「官を殺して大事を醸成すべきではない」と叫ぶ李世英を斬り、仲間に「蓄髮」させて反乱の意志を明確にした。また五色旗からなる 5 営を編制し、みずからは総大哥として「劫富濟貧」を唱え、「三軍司令」「万雲龍」の旗を掲げた。</p>	『清代檔案史料叢編』2、146 頁および「李沅発供詞」(中国近代史資料叢刊続編『太平天国』3、312 頁)。

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			<p>1850 年 1 月に新寧県城を離れた反乱軍は、広西へ入って勢力を数千人に増やした。湖南の防備強化を知った李沅発は広西、貴州、湖南の省境地域を転戦し、5 月には南下して大猺山に近い修仁県へ接近した。李沅発は湖南兵が広西へ動員されたため、新寧県の防備は手薄に違いないと考え、戻って「紳勇に報復」しようと考えた。だが反乱軍は敗北し、新寧県内の金峰嶺に立てこもった李沅発は捕らえられた。</p> <p>李沅発に対する取り調べで焦点となったのは雷再浩反乱との関係であった。李沅発は雷再浩と面識がなく、反乱軍に雷再浩の親族が加わっていたことも偶然に過ぎないと主張した。だが湖広総督裕泰は捕虜の「李沅発は雷再浩の総鉄板」という供述に基づき、両者の関係は明らかであると述べた。7 月に李沅発は北京へ送られ、9 月に凌遲処死となった。</p>	
q	咸豊元年 (1851)	衡陽県	<p>◎左家発(衡陽県人)は眼科医で、1850 年 8 月に船上で李丹(広東人)、張添佐と会った。李丹の目の病気を治療した左家発は、広東の天地会は今や「尚弟会」と名前を変え、互いに助け合うばかりか略奪もできると聞かされ、入会を勧められた。左家発が李丹を拜して師とすると、李丹は彼に「劫数」を免れるための「門牌」3 種類(上蓋は一族を、中蓋は家族を、下蓋は本人を救う)を売るように言った。</p> <p>また李丹は尚弟会内に黄紅白の 3 家があり、広東老万山の朱九濤が黄家、李丹が紅家、張添佐が白家であると告げた。また朱九濤の住処には忠義堂があり、紅白 2 家は黄家の統制を受けると述べた。そして李丹は「金丹始祖洪啓勝、洪英伝授與丹隆、大明国璽高溪義、五祖留記教万宗、大極天図高懸掛、天書宝剑挿斗中、要知原來真正義、八牛下世坐山宗、時常念誦可免災」という歌訣を伝授した。左家発が門牌を受け取ると李丹は広東へ戻った。張添佐も赤松子と名前を変えて岳州、湖北へ行き、薬売りをしながら仲間を集めた。</p> <p>1851 年 3 月に衡陽県に戻った左家発は、知り合いの文廷佑、封桃山ら 24 名を入会させ、歌訣や門牌を伝授した。すると 7 月に広西蒼梧県にいる李丹から手紙が届き、朱九濤は明の末裔で、いま広東の海岸で「前明国璽」が発見されて太平王を名乗ったこと、李丹は平地王、張添佐は徐光王に封じられ、人を集めて近く反逆することを伝えた。そして左家発を衡州大総管に任命し、衡州一帯で蜂起するように促していた。また同時に送られた旗や印鑑には「老万山」の文字や「洪福天徳元年」の年号が記されていた。</p> <p>左家発は仲間の数が少なく、武器もないため、文廷佑らとどうすべきか相談した。そして計画は 100 人以上が集まるまで秘密にし、清軍が広西へ動員された隙について李丹と連絡を取りつつ蜂起することにした。</p> <p>すると李丹から再び手紙が届き、現在彼は梁先生と名乗って永安州にいること、広東の韋大哥らも仲間であると告げた。左家発らは引き続き 40 名余りを入会させ、集めた金で号衣を作るなど蜂起準備を進めたところを捕らえられた。左家発ら 8 名は「謀反大逆」の罪で凌遲処死となった。</p>	『清政府鎮圧太平天国檔案史料』2、431 頁。
r	咸豊元年	新田県	◎劉綱節(新田県人)は衡陽県で知り合いの封桃山と会	『宮中檔咸豊朝奏

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
	(1851)	衡山県 東安県	い、左家発の「尚弟会」に入るように勧められた。彼は 銭 1,000 文を払って「金丹始祖洪啓勝」の歌訣や黄紅白 三家の区別について伝授され、また自ら門牌を印刷し た。 劉輜節が単章詳ら 3 名を仲間に誘うと、単章詳は かつて広東で馮姓の男から「添弟會金蘭結義」歌詞を見 せられたが、そこには「紅旗搶擾、白旗自交、真命天 子、復回明朝」などと記されていたと告げた。彼らは 23 名を集めて結拝儀礼を行い、劉輜節を師として歌 訣などを伝授した。やがて左家発らの組織が弾圧され ると、劉輜節、単章詳らも捕えられて「復興天地会」 の罪で斬首となった。	摺』3、668 頁。
s	咸豊元年 (1851)	常寧県 清泉県 耒陽県 衡陽県	◎湯裡世(常寧県人)と陽方銀(清泉県人)は 1849 年か ら 50 年にかけて呉克修から「長齋(菜食主義)」をする ように勧められ、呉克修を師と仰いで金丹教に入っ た。呉克修は坐功運氣や無生老母の「黙叩(黙祷)」、三 皈・五戒経を念じることを伝授された。帰宅した湯裡 世と陽方銀はそれぞれ数名にこの教えを伝えた。 次に伍先洪(耒陽県人)は 1850 年に呉克修(法名は 普度)を師と仰いで大乘教を学び、一歩から九歩ま での経語や慈航、項航、大悲咒などの経巻を与えら れた。伍先洪はこれを劉代端、蕭開汶、曹玉洸ら 13 名 に伝えた。 さらに呉効南(衡陽県人)は 1851 年 3 月に病気が治 らないことを呉克修に相談した。すると呉克修は自分 が大乘教徒であると告げ、金を出して「一十二歩名目」 を学べば「消災延寿」できると述べた。そこで呉効南は 呉克修を師と仰ぎ、普玉という法名と一歩から七歩ま での「経語」を伝授された。また呉効南は慈航、項航、 大悲咒などの経巻を筆写して家に戻ると、来福堂を立 てて仏像を拝み、「茹素諷誦」を行った。また呉効南は 同族の呉宗葆など数名を入教させた。 湯裡世、陽方銀、伍先洪、劉代端、呉効南らは「各 項教会名目拝師授徒」の罪でウルムチに送られ奴隷と された。	『宮中檔咸豊朝奏摺』3、668 頁。『清 政府鎮圧太平天国檔 案史料』2、431 頁。
t	咸豊元年 (1851)	湘郷県	◎熊聡一(湘郷県人)ら 16 名は「挖煤(石炭掘り)」をし て生活していたが、結拝兄弟をして略奪を働こうと考 えた。そこで 8 月に 55 名を集め、熊聡一を大哥とし て結拝儀礼を行った。9 月に熊聡一は 14 人を集め、 夜中に劉鵬俊の田へ行って稲 20 石を「搶割」した。続 いて熊聡一は李耕亭の家が豊かであると知り、夜間に 40 名余りで押し入り財物を奪った。また屋敷に放火 し、李耕亭の孫を焼死させた。 李耕亭の通報によって、知県朱孫詒が兵役および団 壮を率いて取締に向かうと、熊聡一は 30 余名で狐洞 地方に立てこもり、発砲して抵抗した。だが多くが捕 らえられ、熊聡一も蕭家冲まで逃げたところで逮捕さ れた。熊聡一ら 2 名はさらし首、熊洸大、曾掌四、 曾小五ら 16 名が死刑となった。	『宮中檔咸豊朝奏摺』3、868 頁および 秘密結社項 8889-14 号
u	咸豊元年 (1851)	宜章県	◎王蕭氏は王宏開(宜章県人)の妻で、広東曲江、陽山 県などで乞食をしていた。1837 年に王蕭氏夫婦は広 東で藍世憲(広東人)、李剪保らと添弟会を結拝した。 1841 年に王宏開が死ぬと、王蕭氏は広東に乞食会を 意味する「沙包会」があったことを知り、李剪保、胡金 開(広東人)ら 140 人と共に沙包会を復興した。2 つの	『宮中檔咸豊朝奏摺』3、849 頁および 『清政府鎮圧太平天 国檔案史料』2、550 頁。

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			<p>会は連絡を取り合い、何かあれば檳榔 5 つに頭目の名前を記した「碼子」を送った。</p> <p>1851 年 8 月に王蕭氏は広東で土匪が騒ぎを起こしたことを知り、ついに王麻子らを糾合して曲江、陽山県一帯で略奪を働いた。ついで広東で取締りが厳しいのを知り、王麻子、李添佑、藍世蕙と相談のうえ 300 人余りを集めて抵抗することにした。王蕭氏らは旗幟や武器を整え、清軍と交戦した。</p> <p>王蕭氏は宜章県の金持ちである黄道開に金を貸すように迫ったが拒否され、人々を集めて襲うことにした。彼らが陽山県境の戊壬坑から思仁卡へ向かうと、守備趙鴻賓は兵 60 名を率いて迎え撃った。だが王蕭氏らは清軍を挟み撃ちに、趙鴻賓ら将校 3 名、兵士 11 名が戦死した。</p> <p>彼らは黄道開の家を襲撃したが、宜章県の清軍と戦闘となり、10 数名が殺されて王蕭氏は捕らえられた。また彼らは乳源県境の容家洞で再び清軍に敗れ、60 名が殺されて藍世蕙らは捕らえられた。残りは乳源、曲江県へ逃亡した。王蕭氏、李添佑、藍世蕙は「謀反大逆」の罪で凌遲処死となった。</p>	
v	咸豊元年 (1851)	桂陽県	<p>◎朱幅隆、譚幅は桂陽県人で、1851 年 7 月に広東仁化県で朱亜仔らと「貧苦」について語り、豊かな家が多い桂陽県の魯塘を襲うことにした。彼らは馮房長、劉繼遠(広東河源県人)、張亜三(広西人)、藍世蕙ら 6-700 人を集め、魯塘の范流民、職員譚邦杰の家などを襲って范流民の父親らを殺害した。「粵匪が遊奕」との通報を受けた桂陽県知県方其正は逮捕に向かったが、彼らは抵抗して兵役 3 名、郷勇 2 名を負傷させた。捕らえられた朱幅隆、譚幅はさらし首となった。</p>	『宮中檔咸豊朝奏摺』10、571 頁。
w	咸豊 2 年 (1852)	東安県	<p>◎蔣璿(東安県人)は捐納訓導だったが、1851 年 6 月に訴訟事件で「屢々侮辱をうけ、人を集めて結拜弟兄を行い、幫助を得たい」と考えた。そこで蔣璿は唐衢、蔣衡(共に生員)、蔣順剛ら数十名を集め、2 度にわたり蔣璿を大哥として結拜儀礼を行った。また 1851 年 9 月に僧の景灼は死んだ僧侶の経典の中から斗台神像を見つけ、卿名善ら 43 名を集めて斗台会を立て、景灼を大哥として結拜儀礼を行った。</p> <p>事件が発覚して蔣璿、景灼は絞首刑となったが、蔣璿の弟である蔣璿(生員)は報復を考えていた。</p> <p>1852 年に太平軍が全州に進出すると、「逆党」の羅沅鉦、陳揚廷が知り合いの唐元亨の家を訪ね、人々を集めて呼応するように要請した。「異志の萌した」唐元亨が蔣璿に相談すると、二人は手分けして 1000 名余りを集め、紅布や武器を配って蔣尊式、蔣信顕を先鋒、蔣清訊、李正一を軍帥、鄧添廡を將軍にそれぞれ任命した。また唐元亨、羅元鉦が正副元帥となり、蔣璿は営総となつて、黄白紅青藍の五色旗からなる五軍を編制した。</p> <p>5 月下旬に唐元亨らは井頭圩などで「富戸」から食糧を供出させ、かねてから恨みのあった唐国友を殺して「祭旗」を行った。彼らは石板橋、白牙市に集まり、5 月 29 日に東安県城を攻撃したが、城内の清軍に撃退された。翌 30 日に唐元亨は部下の蔣臣運に「粵匪羅元帥(羅大綱)を冒充」させ、300 名を率いて県城近くの唐帽山に布陣させた。また大江口に一軍を派遣して</p>	『宮中檔咸豊朝奏摺』4、354 頁。同書 10、566 頁。

No.	年 代	地 域	活 動 内 容	出 典
			<p>清朝側の援軍を阻もうとした。そして唐元亨は再び東安県城を攻めたが、多くの死傷者を出して省江橋、白牙市に撤退した。また陳揚廷を道州に派遣し、太平軍の応援を得て再起を図ろうとした。</p> <p>6月4日から清軍は白牙市などで掃討を進め、100名以上を殺害して「太平天国」「太平」と記された黄紅旗を捕獲した。また神仙橋に逃れた唐元亨ら400名が捕らえられ、蔣璜は逃亡した。唐元亨は「謀反大逆」の罪で凌遲処死となった。</p>	

われた程に決定的ではなかったと考えられる¹⁸⁾。

いっぽう表中で明確なのは民間宗教の活動であり、重要だったのは金丹道を名乗った青蓮教非主流派の活動だった。その中心人物は周位掄（即ち張利貞、清泉県人）で、青蓮教に「飭令万雲龍」の文字など天地会の要素を加え、坐功運氣の術を授けた。また1843年に郭建汶（宝慶府人）は「世人の劫難を知った」周位掄を弥勒仏の生まれ変わりとして教主に立てた。翌44年に主流派から排斥を受けた周位掄らは青蓮教を非難し、金丹道と名前を変えて湖南一帯で布教した。さらに郭建汶は四川へ至って劉儀順と名乗り、「天下は久しからずして大乱となる」と述べて灯花教を創始した。この灯花教は太平天国期に貴州の号軍蜂起、湖北の窮困蜂起を起こしたことで知られている¹⁹⁾。

【表1】には[f]の程孔固、[s]の湯裡世のように青蓮教（金丹教）に入り、「長齋（菜食主義）」や坐功運氣、無生老母の崇拜などを行った例が見られる。また[e]の劉祥安、[g]の熊文政、[m]の王幗珍など「茹素念経」あるいは「拝師習教」したために摘発を受けたケースも多かった。次に周位掄が天地会の要素を取り入れた結果、[n]では金丹教徒である董言台、「湖南教匪」の蔣万成、「習教」の罪で流刑となった経験をもつ郭志祿らが結拝儀礼に加わった。[o]の雷再浩が結拝兄弟に特徴的な「拝台」儀礼を受容し、菜食主義者の信者を青教に、そうでない者たちを紅教に分けたのも、蔡少卿氏が指摘するように青蓮教と天地会の融合が進んだ事実を示している²⁰⁾。

1851年8月に礼科給事中の黄兆麟は、湖南各地に紅簿教、黒簿教などの「教匪が充斥」としていると訴えた。彼は「また齋匪があり、名前は青教という。名目は分かれているが、その教えは実は同じであり、みな四川峨眉山の会首である万雲龍を総頭目としており、住んでいる場所には忠義堂の名前がある。教徒への伝道にはみな度牒があり、布でこれを作る。上には『関口度牒』五文字が記され、『保和堂』の印が押されている」²¹⁾と述べている。ここで忠義堂は『水滸伝』の影響によるもので、度牒とは[o]の雷再浩反乱（棒棒会）で用いられたものであった。また[l]では王棕猷の別名に過ぎなかった「万雲龍」が教派の「総頭目」とされており、実際に[p]の李沅發反乱（把子会）でも「万雲龍」旗が掲げられた。さらにその根拠地として挙げられた四川峨眉山は、[d]の張擯による三合会では「五房（福建、広東、広西、江南、山東）」として設定されていない場所だった。四川を発祥地とする青蓮教が独自の解釈を行っていたことが窺われる²²⁾。

これら青蓮教と天地会が融合した事例として注目すべきは、太平天国とも深い関わりを持つ [q] の左家発（衡陽県人）による尚弟会であった。1850 年 8 月に左家発は広東人の李丹なる男から入会を勧められ、李丹を師と仰いで門牌と歌訣を与えられた。この門牌は「上蓋、中蓋、下蓋の区別があり、上蓋は天盤を、中蓋は地盤を、下蓋は人盤である。これを門に貼れば、同じ会の人間であるとわかり、劫数を免れることが出来る」とあるように、末劫思想に基づく宗教性を帯びていた。また伝授された歌訣は「金門の始祖は洪啓勝」と明確にうたい、周位掄が教主であることを示す「天書と宝剣」²³⁾ について言及するなど青蓮教の影響は明らかだった。

1851 年 3 月に左家発が衡陽県で活動を始めると、7 月に広西蒼梧県にいる李丹から手紙が届き、広東老万山の忠義堂で黄家を率いる朱九濤は明朝の末裔であり、いま「前明の国璽」が発見されて太平王を名乗ったと告げられた。この頃太平天国は桂平県金田一帯で清軍と交戦中で、天王洪秀全の別称である太平王の称号もすでに知られていた²⁴⁾。李丹はこれらの情報を入手したものと見られるが、興味深いのは左家発を衡州大総管に任命して蜂起を促す中で「洪福天徳元年」と記された旗や印鑑を送った事実である。

河鱈源治氏の研究によれば、「天徳」は広西の反乱軍首領としてヨーロッパ人の注目を集めた伝説性の強い人物で、1851 年初めに潯州で皇帝に即位したと報じられた²⁵⁾。また朱九濤は後に洪秀全の師匠と噂された男で、清朝は彼が太平天国の重要人物ではないかと見て搜索したが、手がかりを得ることは出来なかった²⁶⁾。

すでに市古宙三氏が解明されたように、朱九濤は本名を邱倡道といい、1855 年に湘軍に殺された「湖南本省の土匪(青蓮教徒)」であった²⁷⁾。駱秉章の上奏によると、彼は「妖異をもって衆匪に推され、普南王を偽称した。また明の後裔といつわって、姓名を朱九濤と改め、その足跡は楚粵の境で時に出没した。徒党は最も多く、咸豊二年(1852)以来郴[州]、桂[陽州]の各州県で城を攻めた匪賊は、多くがその指図を受けていた」²⁸⁾とあり、曾國藩も屢々彼を捕らえようとしたが果たせなかったという。

さて左家発らが集めた人数が足りないと逡巡しているところへ、再び李丹から「期を約して事を起こす」手紙が届いた。それによれば李丹は現在永安州におり、「梁先生」と名前を変えたが、広東の韋大哥らも仲間であると告げていた²⁹⁾。9 月に太平軍は永安州を占領しており、李丹は洪大全と同じく知識人として太平軍の陣営内にいたことになる。洪大全の「湖南、広東会匪名単」は、李丹について「年は四十歳、顔は白くヒゲはない。湖南衡州府人で、広東韶州府の碗山に住んでおり、湖南会匪である」³⁰⁾と供述している。

10 月に左家発らは摘発され、李丹の消息も不明となった。だが先に見た劉代偉反乱を弾圧した湖南巡撫張亮基の上奏（咸豊二年十二月二十六日）は、逃走中のメンバーとして李丹の名を挙げている³¹⁾。むしろそれが同一人物とは限らず、翌年の上奏では李丹が「李州」³²⁾と書き換えられたため、左家発、劉代偉の組織が李丹を通じて結びつくかどうかはわからない。しかし永安州に残った李丹が劉代偉に使者を送り、左家発の場合と同じように蜂起を促

したのだとすれば、先の地方志の記載はつじつまが合うことになる。

ちなみに「天徳」については、小島晋治氏が National Archives で発見した太平軍参加者である鄧亜隆、巫法貴の供述に「道州で仲間に入ったところ、天徳王に見えた。姓は朱で、年は約十七、八歳、背丈は大きかった」「土匪の周法貴は江華県城を襲おうと考え、広西の大勢の匪賊たちと一緒に襲撃した……。旗には天徳王の文字が書かれていた」³³⁾とある。このうち周法貴は道州の頼頭山を拠点としていた匪賊、鄧亜隆が加わった黄亜四の組織は客家を主とする武装集団であり、共に李丹や左家發、劉代偉との関係は見いだせない。むしろ劉代偉反乱軍の掲げた旗の年号は「明命」であり、【表 1】で武装蜂起したいくつかの事例でも「天徳」の年号や王旗を用いた事例は見あたらない。

同じことは広東、広西の事例についても当てはまる。1840 年代に広東で摘発された黄悟空（潮陽県人）らの天地会、高名遠（香山県人）らの興隆会は、いずれも「開口不離本、起手不離三」の暗号を唱え、結拜時に「洪令」の位牌を置いた³⁴⁾。また 1849 年に広州省城の攻撃を計画した鄧南保らの合勝堂は「天地元黄宇宙洪荒日月盈」の文字を用いて部隊を編制し³⁵⁾、1850 年から広東西北部、広西東部で活動した李元宝穀（英徳県人）、胡毛黄五（長寧県人）の反乱軍は軍師、先鋒の名目や「太公旗」を立てた。だが彼らは「決して違悖の蹟迹はない」³⁶⁾と言われたように、「謀反大逆」の罪につながる年号、王号を用いることには慎重だった。

The China Mail は 1851 年 6 月に広西の一反乱軍が天徳の年号を用い、天徳の文字を刻んだ銅貨を鑄造したと報じた。7 月には広州の城壁に両広総督徐広縉を告発する「天徳二年」の年号を記した「皇明後裔朱」の布告が張り出された³⁷⁾。さらに 1852 年 5 月には湖北武昌で「天徳皇帝」の名を用いた「総理軍機鎮守湖北地方大司寇」の郭某による清朝批判の告示が発見された³⁸⁾。だがこれらは全て外側からの視線——ヨーロッパ人であれ、中国人であれ、反乱の拡大に期待や不安を抱いた人々が作り出した言説であった。

つまり李丹が用い、洪大全がみずから名乗った「天徳」の年号や王号は、反体制勢力の実態とは別のところで生み出された反乱軍の表象に外ならなかった。鄧亜隆の供述は天徳王について「広い袖の龍を描いた黄色の長衣を着て、黒い紗の長い羽のついた帽子をかぶっていた」³⁹⁾と述べている。それは雑多な反乱集団を束ねる統一的なリーダーを求めて、太平軍に加わった湖南の人々の期待が生み出したものであり、太平天国も新たな参加者を獲得するうえでそうしたシンボルを必要としたのである。

(b) 道州における太平軍と清朝側の動向

1852 年 6 月 12 日に道州を占領した太平軍の主力は、8 月 9 日まで約 2 ヶ月にわたりここに留まった。その第一の目的は桂林から蓑衣渡までの戦いで消耗した軍の休息と再編制にあった。張德堅『賊情彙纂』は次のように述べている。

道州は周囲を険しい山に囲まれ、山道が一本通じているだけで、人がその力を発揮するには向かない場所だった。賊はここで休養して猛暑を避け、また太平王に長男が生まれたので、生後一ヶ月の祝いの後に進撃を再開すると公言していた。だがそれは実は前のやり方と同じで、毒を蓄えて我が方の隙をうかがっていた。虜にした州民および進撃の途中に脅して従わせた人々を隊伍に編入して部署を定め、功績ある者に褒美を与えた。また装備を新たに作り、制度を補い、武器や弾薬を準備した⁴⁰⁾。

ここからは太平軍が道州の地形の険しさを活用して休息を取り、新たな参加者を軍に編入したことが窺われる。『太平軍目』によると、この時期に「太平湖南道州黄旗前営前旅帥」などの旗を掲げた新しい部隊が編制された。太平天国の旅帥は525名を率いる将校であったが、その配下には「太平広西桂平黄旗前営前壺卒長」「太平広西博白黄旗前営前壺東両司馬」⁴¹⁾など異なる地名を冠した下士官の部隊があり、全員が道州出身者によって構成されていた訳ではなかった。上帝会の信者はそれぞれの地域を統率したリーダーのもとで結束しており、蜂起後もその影響は旗に記された地名という形で残った。だが軍全体で見た場合、同郷を単位とした部隊編制は避けられており、「功績ある者に褒美を与」えることで能力に応じた人員配置を行おうとした太平天国首脳部の意図が窺われる⁴²⁾。

次に史料には「太平王に長男が生まれた」とあるが、洪秀全の長男である洪天貴福（幼天王）は蜂起前の1849年に生まれた。三男の洪天光（光王）、四男洪天明（明王）は共に1854年生まれで、1852年に生まれた息子とは夭折した次男であったと推測される⁴³⁾。ここで張德堅が「前のやり方と同じ」と述べたのは、1852年1月に太平軍が洪秀全の39歳の誕生日を祝い、「五日後に永安州から撤退する」といったデマを流して清軍の出方を探った事実を指している⁴⁴⁾。それでは太平軍が王子の誕生を「公言」したのは、清軍を油断させるための情報操作だったのだろうか。

当時太平天国にとって新兵の訓練と並んで重要だったのは、蓑衣渡の敗戦で失った軍事物資とくに食糧の獲得であった。「道州の地勢は平坦で、四面が川に囲まれており、城内の米糧も少ない。もし幾重にも包囲して補給を遮断し、彼らを逃がさないようにできれば、一気に殲滅することも可能である」⁴⁵⁾と言われたように、道州城内に備蓄された食糧は少なかった。7月に清軍に捕らえられたある脱走兵の供述は「現在食糧が不足し、一人当たり朝晩ただ小さな碗に飯を二杯与えられるだけで、空腹は満たされない。火薬も少なく、十余担が残っているに過ぎない……。賊は五、六月以来、毎日のように仲間を派遣して四郷へ赴かせ、食糧を奪い取っている」⁴⁶⁾とあるように、太平軍内で食糧と火薬が不足し、郊外の農村地区で調達を図らなければならなかったと述べている。

前稿で紹介したように、道州で太平軍に加わった蔣光明（田骨洞村人）らは、太平軍の將兵が彼らの村に現れて「金持ちに向かって米や銀錢を要求」⁴⁷⁾したと述べている。広西時代の太平天国は「資糧を搜刮し、富室や巨家に遭うたびに、必ず土を三尺掘った」⁴⁸⁾とあるよ

うに、有力者の財産に対する徹底した搜索を行っており、湖南南部でも同じ手法が採られたと考えられる。また光緒『永明県志』には「洪逆が城に占拠した時、かつて偽示を出して各郷に進貢をさせ、偽りの符札を与えた」⁴⁹⁾とあり、あらかじめ告示を出して期限を設け、食糧を供出させることも行われた。

さらに『賊情彙纂』によると、「偽王や高官に何かめでたい事があると、部下たちは金を出し合って争うように礼物をささげた」とあるように、太平軍内では指導者の祝い事がある度に人々が貢ぎ物をささげ、金品ばかりか食糧まで供出したという。これを「貢献」と呼ぶが、戦利品は財産の私有を禁じた聖庫制度に基づいて上官への報告が義務づけられた。また「甘んじて賊に従っている者は、これに借りて出世の道具にした」⁵⁰⁾との言葉が示すように、人々は貢ぎ物を忠誠の証を立てるチャンスと考えたという。

ところが道州で太平軍に合流した周法貴や黄亜四の部隊は、江華县城の攻撃に当たって略奪と戦利品の分配を行った。巫法貴、鄧亜隆らの供述によれば「私は長衫を一着、ズボン一着、銅錢四百文を探し出して手に入れたが、大頭目の周法貴らは全部で花銀二千兩余りを衙門の中から奪い取った。頭目の周法貴は一千兩を取り、二哥の何運昌は八百兩を手にした……。周法貴は我々に銀二十元を分けてくれ、我々下っ端の連中はそれを一人当たり錢二百文ずつ山分けした」「江華県の役所と商店で合計銀二万兩を奪い、私は銀五十兩を手に入れた」⁵¹⁾と述べている。これは羅大綱の率いる太平軍の正規部隊に配属された蔣光明らが、略奪品について言及していないのと比べて大きな違いとなっている。

これらアウトロー的な性格の強い集団が加わることは、太平天国の制度を揺るがしかねない危険をはらんでいた。このため蜂起当初の太平軍は張釗らの天地会軍をあえて冷遇し、彼らを統率することが可能かを見極めようとした⁵²⁾。道州でも「新しく従った土匪は賊によって拘禁され、外出することが許されない。その髪が長く伸びれば逃げられず、逃げて官兵に殺されるため、自然と死力をつくして賊となるからである。だが土匪の待遇は大変に悪く、土匪たちは賊に従ったことを後悔して脱走したいと考えている」⁵³⁾とあるように、外出を禁じて略奪のチャンスを奪い、粗末な生活に耐えさせるなどの試練を課した。このため参加者の中には後悔する者が多かったという。

このように見ると道州で洪秀全の次男誕生が「公言」されたのは、祝儀の名のもとに私物化された物資を没収し、統制を強化するための口実であったと考えられる。『賊情彙纂』は「賊中で貢ぎ物を送る理由を細かく尋ねると、またやむを得ずそうしている……。私蔵した金銀や宝物が多過ぎると、ひとたび上官に気づかれれば部屋を搜索され、その罪を数えたてて殺されてしまう。このため咽喉から手が出るほど欲しくとも、これを手に入れて高飛びしようとは考えない」⁵⁴⁾と記している。王子誕生の宣伝は略奪物の提出を促すことで物資不足を解消し、新たに参加した反乱勢力の経済的基盤を掘り崩してその離反を不可能にするための策略だったと言えよう。

いっぽう清朝側の状況はどうであっただろうか？ 前任湖南提督余万清、署広西提督劉長

清の解任後、綏靖鎮総兵和春が率いた清軍将兵は 15,000 名いた。彼らの食糧は広西の官員が軍に従い、永州に転送のための糧台（補給基地）を設けて支出したが、これと広西省内の反乱軍鎮圧のための費用を併せると毎月 60 万両が必要となった。加えて太平軍の桂林、全州攻撃によって北方からの輸送ルートが滞ったため、「二月末から四月まで、支出した経費は一百数十万両になるが、みな布政使や塩法道の各倉庫から陸続と借り受けたか、塩埠の鋪戸から暫く融通してもらったもので、すでに一銭たりともなくなりつつある」⁵⁵⁾とあるように、深刻な経費不足に陥っていた。

さらに清朝は湖南の防備を固めるべく、四川、江西、陝西、河南、福建から新たに 13,000 名の兵を動員した。これに必要な費用も巨額となったが、中央政府は欽差大臣賽尚阿らが要請した 300 万両のうち半分しか支出することが出来なかった⁵⁶⁾。広西の負担軽減についても広東側で工面するように命じたうえで、徐広縉らに「もし湖南で入用がはなはだ急な場合は、迅速に酌量して支出せよ」⁵⁷⁾と指示せざるを得なかった。

こうした現実を前に、永州の糧台で任務に当たっていた広西按察使姚瑩は、補給の困難さを理由に「速やかに兵を進める」ことを強く求めた。彼は次のように述べている。

本月初八日（7 月 24 日）に賊が江華県に遣わされて食糧を奪った。そこは兵が少なかったため、賊は不意をついて城に入り占領した。その人数は実に長髪の者が五、六百人、土匪が六、七百人に過ぎなかった。地方官は二、三千人と報じて失守の罪を免れようとしたが、それは事実ではない。また官兵は戦って敵に打撃を与えられない度に、賊は五、六千人いたと言って責任逃れをする。これらのことを人々はみな知っており、まことに憎むべきであるが、凡庸で知識のない書生や臆病で無能な将校たちはみな口を揃えて真実だと思いこみ、互いに驚かせ合っている。

古来兵は迅速を重んじるべきであり、今日のように留まって待ち、みずから時機を逸した例を聞いたことがない。賊衆は数千に過ぎず、官兵や壮勇は二万人を下らない。賊の数倍の兵力を持ちながら進もうとせず、増援の兵を待って賊を包囲しようとするのは、臆病で無能な連中の口実に外ならない。試みに考えても見よ。賊で戦える者が二、三千人しかいないのは、すでに永安州で誰もが聞いていた話だ……。あるいは土匪で賊に従った者が二、三千人いると言うかも知れないが、その多くはすでに逃げ出した。現在本当に賊に従っているのは一、二千人に過ぎず、元からの賊と併せても五、六千人に過ぎないのである……。

もしさらに因循してみずから誤れば、賊の食糧は次第に満ち、火薬もようやく足り、その人数も日々増える。そうなったら諸公はいかなる術で賊を破ると言うのか？ しかもわが兵糧は不足しており、六月（即ち新暦 7 月）は何とか支えられても、七月（8 月）には支給のしようがない。兵たちは食えなければ必ず散じてしまう。いわんや新たに動員された兵、新しく招かれた壮勇がみな腹を空かせていては、どうやって任務を果

たせると言うのか？ 賊を殺すことが出来ず、ただ援軍を求めるが、兵が増えても食糧はないのだから、その害毒は言い尽くせない。今こそ勝利する好機であるのに、賊を滅ぼせなければ一瞬にして敗北へと転じてしまうだろう⁵⁸⁾。

ここで姚瑩は太平軍の実数が道州での参加者を併せても数千人であり、清軍の現有兵力で十分に平定可能だと述べたうえで、食糧が逼迫している現在こそ一刻も早く攻勢をかけるべきだと主張している。また江華、永明両県の事例から、地方官や将校が太平軍の兵力を過大評価して敗戦の責任を回避し、攻撃を先延ばししている現状を批判した。そして援軍の到着を待って勝機を逸すれば、相手を立ち直らせてしまうばかりか、食糧不足によって事態は収拾がつかなくなると警告した。この姚瑩の議論は太平軍の兵力を少なめに見積もっているものの、清軍の問題点を率直に語っている。

6月23日に和春は道州東北の五里亭に軍を進めたが、太平軍の抵抗を受けて退却した⁵⁹⁾。7月6日に和春は五里亭を占領して陣地を構築したが、以後も両軍は「城壁を高くし、城外には土城を築き、主要な道には防衛の関所を設けた」とあるように守りを固めてにらみ合いを続けた。結局姚瑩の主張した速戦論は斥けられ、7月19日に永州に到着した賽尚阿は広西富川県へ移動していた劉長清の軍を道州の西側を包囲するために引き返させた⁶⁰⁾。また衡州の湖広総督程喬采は2,700名の援軍を寧遠県へ派遣し、副将鄧紹良の指揮のもとで太平軍の南進に備えさせた⁶¹⁾。さらに和春と河北鎮総兵常祿は7月30日から五里亭、龍安橋などでしばしば攻勢をかけたが、「小勝に過ぎず、いまだ得手を得ず」⁶²⁾とあるように戦闘の主導権を握ることはできなかったのである。

2. 太平天国の郴州進出と地域社会

(a) 太平軍の郴州占領と清軍の防備体制

8月10日に太平軍は道州を退出し、東へ向けて進撃を開始した⁶³⁾。12日には嘉禾県城を占領し、14日には桂陽直隸州に軍を進めた。さらに17日には桂陽州城外5キロの七里亭で追撃してきた和春の率いる清軍を破り、その日のうちに郴州城を占領した⁶⁴⁾。

この太平軍の郴州進出は、その後展開された北上戦略の第一歩であった。『賊情彙纂』によると、道州の退出にあたって軍内では論争が発生した。人々の多くは故郷を懐かしみ、灌陽県から広西へ戻ることを望んだ。しかし東王楊秀清は次のように言った「すでに虎の背中に乗ったのだ。どうして恋々とすることができようか？ 今日の上策は広東、広西を棄てて顧みず、真っ直ぐに突き進むことである。揚子江の流れに従って東進し、城堡を奪い要害を捨て、もっぱら金陵をめざして、そこに拠って根本とするのだ」と。これを聞いた洪秀全は深くうなずき、ついに郴州を攻めて北へ向かったという⁶⁵⁾。

現在 National Archives に供述書が残っている太平軍兵士は、広東連州一帯で「道筋や官兵の有無」⁶⁶⁾を探っているところを捕らえられた人々で、当時の太平軍が広東へ進出する可

能性を模索していたことを伝えている。また『盾鼻随聞録』は楊秀清が「湖南は魚米の郷で豊作が続き、いたるところで搶掠が可能」⁶⁷⁾と考えたと述べており、永安州の退出後と同じく楊秀清のイニシアティブで東進（および北上）が決定したと考えられる。しかし崔之清氏も指摘しているように、それは直ちに南京を攻略する戦略が定まったことを意味しなかった⁶⁸⁾。この頃捕らえられた別の密偵は「逆匪は衡州一路から長沙を攻め取り、一気に湖北荊州に向かおうとしている」⁶⁹⁾と供述しており、後に河南（中原）に都を置こうとした北上論がイメージされていたと見る方が妥当であろう。

ところで清軍は何故いとも簡単に太平軍の東進を許してしまったのだろうか。和春と共に太平軍を追撃していた候補知県江忠源は次のように述べている。

総兵の和春が初め諸軍を率いると、忠源は彼と軍議を行って事をなし遂げようとした。しかし諸將が怯えて命令に従わず、江華、永明県が相繼いで陥落した。賊が七里江から逃げた時も、計画では一万一千人の兵を先回りさせて行く手を阻み、九千人に後を追わせるつもりだった。ところが如何せん迎撃の軍が遅々として進まず、通過した州県も門を開いて手をこまねいているだけで、一、二刻でも城を守って追撃の兵を待つことができなかった。このため嘉禾から桂陽州、郴州まで、賊は無人の野を行くが如きであった。賊もわが兵が先回りできないと知って、後衛部隊に追撃の軍を迎え撃たせ、前衛の兵は城を攻めた。こうして永興、安仁、攸県、醴陵一帯はついに守りきれず、次第に省城（長沙）に逼ったのである⁷⁰⁾。

ここでは和春と江忠源が軍を二手に分け、前後から太平軍を挟み撃ちにする計画を立てていたものの、怯えた軍が太平軍の進撃について行けず、地方官や守備隊も抵抗しなかったと述べている。実際に嘉禾県知県呉淳韶は城を捨てて逃亡し⁷¹⁾、桂陽州知州李啓韶（山東巡撫李鴻の子）は落ち延びる途中で自殺した⁷²⁾。また署郴州知州孫恩葆は初め戦死が報じられたが、後に「印を棄てて逃げた」⁷³⁾ことが発覚した。清軍の不甲斐ない戦いぶりに、咸豊帝も「派兵して後から追いかけるだけで、決して先回りをして迎え撃ち、奇策を用いて勝とうとしない」「どうして文武の地方官が全く準備をせず、一度賊の攻撃を受けると数日も持ちこたえることが出来ないのか」⁷⁴⁾と叱責を浴びせた程だった。

これら一連の敗北について、程喬采は次のような釈明を行っている。湖南南部は州県と要所の数が多く、これを本気で守ろうと思えば1～2万名の兵力が必要だが、もとより余剰の兵力もそれを支える兵糧もない。そこで各地に団練を結成させたが、太平軍が全州で守備隊を全滅させた噂が伝わると、動揺した郷勇たちが逃げ出し、城内の紳士、商人も一家を挙げて避難した。しかも追撃の清軍が太平軍に追いつくことができないため、無人となった城が次々と陥落したのであると⁷⁵⁾。

確かに湖南南東部の防備は、省都長沙に比べれば手薄であった。太平軍が湖南に入った6

月初めに湖南巡撫駱秉章は長沙の兵力が少なく、湖南各地から増援の兵を集めて防備を固めると報告した⁷⁶⁾。程裔采も江西兵 2,000 名を長沙へ派遣するよう求めたが⁷⁷⁾、郴州一帯については前任湖北巡撫羅繞典と堅壁清野の実行に取り組むと報じたに止まった⁷⁸⁾。さらに 7 月末に清朝は署江西巡撫陸元烺らに江西、湖南省境の警備を固めるように指示した⁷⁹⁾。だが江西にも兵力に余力はなく、陸元烺は湖南へ送った兵の一部を引き返させ、福建、浙江から援軍を派遣するように要請せざるを得なかった⁸⁰⁾。

しかし清軍の士気が上がらなかった最大の理由は、地方長官たちの行動と清朝の曖昧な処分にあった。最初に批判されたのは湖北巡撫龔裕で、太平軍が道州を占領した 5 月に「軍事に暗く、病気が再発」したことを理由に休養を申し出ると、解任されて常大淳と交代するように命じられた⁸¹⁾。次に非難されたのは程裔采で、江南道監察御史の黎吉雲（湘潭県人）は彼が前線から離れた衡州に駐屯して防備の強化を怠り、太平軍の進撃を止められなかったと訴えた。また太平軍が永州に接近すると程裔采は「賊を畏れて先に逃」げ、城内の人々が泣いて引き止めても聞き入れなかった。さらに程裔采が粗末な格好で長沙に到着すると「衆議が沸騰」し、不安となった彼は再び口実を作って危険のなくなった衡州へ去った。この間各地でパニック現象とそれに乗じた強盗事件が発生し、多くの死者が出たために「人々は咎を総督に帰し、骨の髄まで恨んだ」⁸²⁾ という。

9 月 7 日に郴州陥落の知らせが北京に届くと、咸豊帝は賽尚阿、程裔采、駱秉章の処罰を命じ、徐広縉に兵を率いて衡州へ向かい、賽尚阿から欽差大臣の関防を受け取って代わりに指揮を取るように命じた⁸³⁾。だがその後 3 人は解任のうえ引き続き任務に当たることになった⁸⁴⁾。また桂林で休養を申し出た広西提督向荣は、病気を口実に戦いを避けているとの理由で新疆送りを言い渡されたが、9 月に彼が戦線に復帰すると処分は見送られた⁸⁵⁾。それらは太平軍の長沙接近という事態を前に人材を確保するための苦肉の策であったが、中途半端な処分は人々の不満を募らせた⁸⁶⁾。

太平軍が道州にいた 7 月、枝江県知県朱啓鴻が「妄言を吐いて兵を請うた」との理由で告発された。彼は広西桂林人で、賽尚阿と鄒鳴鶴が「敗北を覆い隠して勝利と報じ、陛下を欺いている」ことに憤慨した。また清軍の敗北は「智恵と勇敢さがなく」「衆に恃んで横行している」ことが原因だと考えた朱啓鴻は、自分に「万衆の師」を与えて太平軍を殲滅させてほしいと願い出た。これらの要請は「冒昧で分を越えている」⁸⁷⁾との理由で斥けられたが、当時の体制派知識人の苛立ちをよく伝えている。さらに兵科給事中袁甲三は解任された高官を軍中に残しても、従来通りの待遇を受けるために効果がないと指摘し、龔裕や城を失った地方官を厳しく処罰するように求めたという⁸⁸⁾。

いっぽう快進撃が可能となった太平天国側の要因は何であろうか。太平軍が郴州を占領後、先鋒隊による長沙攻撃が始まった 9 月に賽尚阿らは次のように分析している。

私共の調べによると、この逆匪らは道州を逃げ出して以来、わが兵が道々追撃を行っ

て多くを殺したものの、通過した州県で土匪が多く従い、その数はどこでも一、二千人にのぼった。その中には機に乗じて煽動する者、ひそかに賊中から出入りして往来し、各地の兵勇によって捕らえられたり、殺されたりしている。現在逆匪の大部隊および各逆首はなお郴州にいるが、永興、興寧、安仁県の土匪たちがこれと結びついて次々と立ち上がった。また聞くところでは、賊中では衡州から真っ直ぐに長沙、荊州を攻めるといふ噂があるという。各州県の官吏や民、勇練の多くは賊が来たと聞くと、立ちどころに総崩れとなり、ついには口実を作ってあらかじめ避難する者も現れた。このため城は次々と失われ、賊の勢いは益々盛んとなり、各地の土匪で呼応する者がいよいよ多くなるのである⁸⁹⁾。

ここからは太平軍が道州を進発した後、各地で反乱勢力が呼応し、清朝側が敗北を重ねるにつれてその数が増したことがわかる。李秀成は「のちに軍を移して郴州へ行ったが、ここでも二、三万人が加わり、茶陵州でも数千人を得た」⁹⁰⁾と供述している。また『賊情彙纂』も先に検討した劉代偉反乱の関係者が「人を遣わして勾結し、来たりて[郴]州城を取り、ついにその郷を焚殺して、家中賊に従った」⁹¹⁾とあるように、厳しい弾圧を受けた報復を果たすべく太平軍に加わったと述べている。

檔案史料によると、9月に桂陽州白水洞の「土匪」数百人が新田県境に入り、26日に県城を攻撃した。その首領は李觀隴親子と鄺礼相で、「粵匪の未靖に乗じて勾結して滋擾」⁹²⁾を図ったものだった。また8月には広東仁化県、樂昌県で1,000名余りの「匪徒」が「広西逆匪と勾結して、来たりて共に郴州に向かい、仲間に入ろう」とした。彼らの多くは広西で解散した壮勇や「游民」で、9月17日に桂陽県の高排へ向かったが、湖南の清軍によって撃退された⁹³⁾。さらに8月に鄺県で「土匪」が弾圧を受けると、10月にその仲間が「広東匪徒」と結んで報復を図り、県城を襲撃する事件が起きた⁹⁴⁾。これらは湖南南部の反政府勢力が積極的に太平軍に呼応した事実を示している。

それでは彼らはなぜ太平軍に呼応したのだろうか？ その理由を考えるうえで、【表1】[w]の東安県の事例は示唆に富んでいる。蔣瑣（生員）が結拝儀礼を行った罪で処刑された兄のために報復のチャンスを窺っていると、「逆党」すなわち太平軍の工作員である羅沅鉦、陳揚廷が知り合いの唐元亨の家を訪ね、人々を集めて呼応するように誘った。「異志の萌した」唐元亨が蔣瑣に相談すると、蔣瑣は營総、唐元亨、羅沅鉦は正、副元帥を名乗って1,000名余りを集めた。そして「富戸」から食糧を供出させた彼らは、5月29日に「太平天国」「太平」と記された黄紅旗を押し立てて東安県城を攻撃した。結局彼らと太平軍の合流はならず、唐元亨らは敗北して殺されたが、太平軍の側から土着の反政府勢力に対して積極的な働きかけがあったことがわかる⁹⁵⁾。

現在 National Archives に所蔵されている林二盛、唐亜晩の供述書は、この太平軍の工作員について具体的に語っている。二人は共に広東西寧県人で、1852年8月から9月に仁化

県と曲江県で黄脳率いる反乱軍に加わった。彼らは清軍に敗北し、韶州城内に潜伏していた。すると11月4日に「長沙賊匪」の李亜二ら4名が訪ねてきて、「李亜隴の仲間に長沙へ行って会合」するように勧めた。当時太平軍は長沙を攻撃中であり、兵力の増強を図ったと推測される。李亜二らは12月末、清軍の警戒が厳しい場合でも1月には仁化县へ集合して長沙へ向かうように促して帰ったという⁹⁶⁾。

その後11月30日に太平軍は長沙攻撃をあきらめて北上し、彼らも合流を果たせないまま捕らえられた。だが当時の太平軍において、各地の反政府勢力に対するオルグ活動が組織的に行われていたことは明らかであろう。他にも太平天国の密使が派遣された事例として、9月に湖南北部の瀏陽県で蜂起した周国虞らの徴義堂反乱が挙げられる⁹⁷⁾。また12月に岳州で発生した晏仲武反乱の場合は、「偽提督の職を受け、軍を招いて賊を助けた」⁹⁸⁾とあるように官職を与えられた。さらに攸県で蜂起した劉祖思、黄杰高らは「前に西匪から偽職、偽牌を与えられ、人々を集めて事を起こした」⁹⁹⁾という。こうした積極的な動員工作こそは、兵力の拡大と相まって太平軍の快進撃を可能にしたと言えよう。

(b) 太平天国期の湖南における地域社会の変容と清朝統治

さて太平軍の占領した郴州は、湖南南部における流通の要衝であった。郴州の陥落を報じた賽尚阿の上奏は「この地は頗る豊かであり、市場と店が集まっており、広東から山を越えて湖南に入る要地」だと指摘したうえで、ここで太平軍が船を手に入れば北進が可能になると指摘し、長沙および永興、耒陽県一帯の防備を固めると述べていた¹⁰⁰⁾。実際は郴州占領から3日後の8月21日に西王蕭朝貴率いる先鋒隊が陸路長沙へ向けて出発し、8月31日には衡州府の安仁県を、9月3日には長沙府の攸県を占領した。さらに7日に醴陵県を攻め落とした先鋒隊は、11日には長沙郊外の石馬鋪で西安鎮総兵福誠の率いる清軍を破り、省城の南門に到達して攻撃を開始した¹⁰¹⁾。

湖南における太平天国の勢力拡大を語るうえで、忘れてならないのが宮崎市定氏と小島晋治氏の論争である。宮崎氏は太平天国の構成員を分析するうえで重要なのは挙兵から武昌攻略までの時期であると述べたうえで、太平軍に参加したのは多くが農業より離れた遊民であり、南京条約締結後にアヘン貿易の中心が広東から上海へ移ったために失業した秘密結社(三合会)のメンバーであったと指摘した。さらに農民の参加がなかった訳ではないが、彼らの多くは望んで加わったのではなく、少なくとも農民運動と定義できるほどの比重を持っていたとは言えない、むしろ太平軍の迅速な機動性を可能にしたのは秘密結社の吸収であったと主張した¹⁰²⁾。

これに対して小島晋治氏は、宮崎氏の議論が太平天国の発生原因を外国関係の変化に限定し、中国社会内部の諸矛盾から解明していないと批判した。そして湖南、湖北の事例を手がかりに、太平軍の進出に応じて抗糧および抗租暴動が発生したことを指摘し、宮崎氏が太平天国は農民戦争ではないと結論づけたのは誤りであると反論した¹⁰³⁾。

今日振り返ってみると、いわゆる農民戦争論が社会的背景の異なるドイツの事例を基準に進歩主義的な評価を試みたことへの違和感はぬぐえない。のちに小島氏は科举制度をもつ中国では社会階層が流動的だったため、太平天国も「官」への強い上昇志向を持ち、農民自身の利益を恒久的に保証するような農民自身の権力ではなかったと述べている¹⁰⁴⁾。

また宮崎氏は太平天国をアヘン戦争の延長と捉え、上海の開港によって不景気となった広西、湖南で太平天国は成長したが、逆に開港の結果好景気となった揚子江下流域では勢力が伸びなかったと述べた。実際には湖南南部の流通拠点が衰退したのは太平天国後のことと考えられ¹⁰⁵⁾、宮崎氏の説には細部に疑問が残る。だが W. Skinner のマクロリージョン説によると、19 世紀前半の広東、広西では経済活動が落ち込み、逆に揚子江下流域では好調であったという¹⁰⁶⁾。太平天国の時代を大づかみに捉えたという点では、宮崎氏の説は示唆に富んでいると言えよう。

いっぽう宮崎、小島両氏の議論において共通するのは、「農民」という概念をめぐる日本的な発想の影響である。そこに歴史の担い手としての直接生産者の姿を見るにせよ、太平軍への参加をためらう土地への執着を見るにせよ、流動性の大きな社会において移動をくり返し、太平軍の主要な担い手となった下層移民に対する眼差しは不足している。むしろ彼らが移民であるがゆえに、太平天国の指導者がアヘンの密売業者であったと断ってしまう宮崎氏の説は、イネを作る定着農耕民以外の多様な職業をまっとうな生業として認めない日本人の固定観念に囚われた議論と言うべきであろう¹⁰⁷⁾。

それでは実際はどうだろうか。郴州一帯で太平軍に参加した人物として、侍王李世賢の部下として浙江湯溪県を守った忠裨天将李尚揚がいる。彼は湖南安仁県人で、「道光五、六年(1825, 1826)から父親に従って広東の連州へ行き、塩の商売をしたが、偽西王蕭朝貴に捉えられて賊中へ入った」¹⁰⁸⁾とあり、長期にわたり湖南、広東省境で塩の交易(恐らくは密売)に携わったことがわかる。『賊情彙纂』によると、郴州付近では鉞山労働者を初めとして船引の人夫、埠頭の労働者、籠かき、鉄匠や木匠など「耕すべき土地がなく、生計を立てられない」雑多な職業の人々が加わった。彼らは「みな一年中働いても、いまだかつて腹一杯になったことがなかった。[太平軍に] 捉われて働いたところ、賊は必ず彼らをよく待遇したので、数ヶ月後にはなんと老兄弟となった」といい、「土営」すなわち城壁の下までトンネルを掘り進め、地雷で爆破する工兵隊に加わって活躍したという¹⁰⁹⁾。

次に小島氏が太平天国と農民の関係を検討する中で取りあげた武岡州の阻米事件(1843 年)、耒陽県の抗糧暴動(1844 年)を見てみたい。檔案史料および地方志によると、阻米事件の首謀者である曾如炷(曾保団爛屋衝人)は監生で、高沙市で賭博場を開くなど「家は頗る富」であった。武岡州は穀倉地帯で、資江下流の安化県、益陽県に米を搬出していた。だが 1842 年に邵陽県、湘郷県の商人が武岡州の鄧姓と結んで米の搬出を試みると、曾如炷、楊善芳ら 13 名はこれを阻み、出境を許さなかった。客商たちの訴えにより、署知州徐光弼は曾二喜、楊老二を捕らえたが、翌年 5 月に二人は釈放された。

曾二喜らが釈放されると、曾如炷、楊善芳らは楊居南の家に至り、紳士たちに釈放を働きかけた謝礼を出すように迫ったが、楊居南はこれを拒否した。6月に楊居南の家が略奪に遭うと、楊居南は曾如炷、楊善芳らの仕業であると訴えた。署知州徐光弼は差役、官兵を率いて彼らを搜索し、屋敷を焼き払った。

難を逃れた曾如炷らは仲間および曾、楊二姓の人々を集め、徐光弼が城へ戻る途中を取り囲んで談判することにした。不穏な動きを知った徐光弼が急ぎ城へ戻ると、曾如炷らは州城に押しかけて事件のもみ消しを図り、応じなければ徐光弼を殺すことにした。6月15日に300人余りが州衙門へ至り、外部と連絡を取ろうとした徐光弼を殺害した¹¹⁰⁾。

いっぽう未陽県抗糧暴動の主導者となった陽大鵬（西郷唾子山人）は生員で、1842年に東郷の段拔萃が胥吏の錢糧、漕米に対する浮収を北京へ訴えると、村々から訴訟費を集めて支援した。1843年に段拔萃が誣告の罪によって流刑となり、未陽県に監禁されると、陽大鵬は科挙試験のボイコットや上告を唱えた。また4月には段拔萃の親戚である段基望と共に県城へ赴き、取り調べ中だった段拔萃を奪い返して城外へ連れ出した。

その後脱獄の罪を恐れた段拔萃は湖広総督衙門に自首したが、陽大鵬とその仲間は水口菴に福星公館を建てて納税者から1石当たり錢800文を徴収し、訴訟費に充てようとした。また1844年初めに陽大鵬は官が定めた錢漕徴収の規定を書き換え、衡州府城の外に鉄の碑文を立てると言って「聯票を編立し、局を設けて錢を集」め、東西両郷の納税者から錢2,000串を集めた。5月に未陽県では錢糧3,000両が未納となったが、それらは段姓、陽姓の人々が陽大鵬の「阻載(妨害)」によって納税を見合わせたためであることが判明した。そこで地方政府が督促に向かうと共に、陽大鵬が作らせた鉄の碑文を押収した。

6月に陽大鵬の弟である陽大鳩ら4名が訴訟費の徴収をしているところを捕らえられ、福星公館の印鑑を押した聯票根などが押収された。事態が発覚したことを知った陽大鵬は弟たちを奪回しようと考え、7月2日から1,000名余りを集めて未陽県城を攻めた。城は数回の攻撃によっても陥落せず、副将忠祿、守備方世儒らの率いる清軍が到着すると反乱軍は敗北した。清軍は陽大鵬らの拠点であった西郷の魚陂洲、唾子山、水口菴の福星会館を焼き払い、8月には陽大鵬も捕らえられた¹¹¹⁾。

以上が二つの事件の顛末であるが、その第一の原因は小島氏も指摘している通り、銀価の高騰による土地税の負担増加と消耗部分を名目とした漕米の法外な徴収にあった¹¹²⁾。段拔萃の自首後、陽大鵬とは別に税の軽減と胥吏の解任を求めた梁人望も「錢糧や漕米の代納を引き受けていたが、銀や米の質が悪いと交換するように求められ、さらに立て替え分の利息まで取られたので恨みを抱いた」¹¹³⁾と述べている。

だが暴動が発生した直接のきっかけは、下層のエリートが地域社会における政治的影響力を発揮しようとして生まれた矛盾や対立であった。例えば曾如炷らが阻米を行った背景には、米の搬出をめぐる鄧姓と曾姓、楊姓の競合関係があった。また陽大鵬の県城襲撃は仲間の奪回が目的であり、公館を建てて人々から訴訟の費用を集め、錢漕徴収の規定を書き換え

るといった行為が地方政府の取締りを受けた結果であった。さらに曾如炷は知州の殺害に当たって次のように言ったという。

将来大人が「鎮圧のために」やってきたら、我々はみな道に跪いて迎え、「官が逼ったために民が変を起こしたのです」と話をすれば、罪を逃れることができる。たとえば数人が命で償うことになっても、以後州官は二度と捕らえに来ようとはしないだろう。そうすれば我々はこの一帯で覇を唱えることが出来るのだ¹¹⁴⁾。

ここからは曾如炷が地域リーダーとして、地方官の干渉を可能な限り排除したいと考えていたことがわかる。また陽大鵬は「実に人を取り戻すために県城攻撃を決意した」¹¹⁵⁾と供述したが、彼の決断は逮捕された陽大鵬らの親族が公館を訪ねて泣いて訴えたため、彼らを奪回することで自らの政治的威信を示す必要に迫られた結果だった。

すでに別書において述べたように、19世紀の南中国では科挙エリートの資格を持たない新しい地域リーダーが納税や地方官との交渉を通じて影響力を行使していた¹¹⁶⁾。むしろ彼らのリーダーシップは合法的なものではなかったが、団練の結成において大きな役割を果たし得るもので、じじつ曾如炷、陽大鵬は数百から千人規模の人々を動員する力を持っていた。しかし清朝の地方政府には彼らを効果的に活用するだけの柔軟性がなく、彼らを知州殺害や県城襲撃という実力行使に迫りやっただけか、瀏陽県の徴義堂反乱のように地方の自衛組織が太平軍に加勢する事態を生み出した。

また地域社会に対する影響力を行使すべく、阻米事件を起こして摘発を受けたのは下層のエリートに止まらなかった。1832年に新化县では文挙人の毛蔚、武挙人の劉岳が「水卡を私設し、販米の船隻を勒索」するという事件が発生した。新化县も穀倉地帯で、この年下流の益陽県で米価が騰貴すると、客商や地元の商人が米を運んで利益を上げようとした。すると毛蔚は「米販を阻み止めて銭文を騙し取ろう」と考え、劉岳と相談のうえ新化县の胥吏だった劉巨高ら11名を集め、上渡江を通過する米の運搬船から大船3,000文、小船1~2,000文の通行料を徴収した。また彼らは金を払った船に「毛蔚記」と記した小票を与え、金を払おうとしない船には「毆搶」を行った。商人たちは「その兇横を恐れて、銭を与えて暴行を免れようとした」といい、被害総額は銭数万文にのぼった。

事件が発覚すると毛蔚、劉岳は文武の挙人資格を剥奪されて捕らえられ、毛蔚は獄中で病死し、劉岳は流刑に処せられた¹¹⁷⁾。だが翌1833年にも邵陽県、新寧県、武岡州などで阻米、搶米事件が発生し、その首謀者の一人であった嚴本加は州同職を持っていた。また邵陽県の太平郷では曾衛人が「各廟の村民」を集めて穀物販売の定価を取り決め、これに従わなかった曾宗遠（挙人）の家を襲撃したという¹¹⁸⁾。

これらはいずれも清朝の地方統治が行きづまる中で、新興勢力として台頭してきた地域リーダーと科挙資格を擁した従来型のエリートが、地域社会に対する政治的影響力をめぐって

激しく競合していた様子を示すものと考えられる。

さらに太平天国時期の湖南を特徴づけるもう一つの事実は、地方官や胥吏の不正をめぐる事件が続発して統治権力の正統性に疑問符がついた点であった。湖南の「吏治廢弛」問題は湖南巡撫陸費瑤が欠員の補充に当たり賄賂を受け取ったと告発されたことから始まった¹¹⁹⁾。また布政使万貢珍が地方財政に融通を利かせることを認めたため、大胆となった部下たちが「丁役のために営私舞弊をするようになり、発覚すれば互いに庇い合った……。大抵の州県では権限を門丁に委ね、錢糧については胥吏の言うことを聞いた」¹²⁰⁾とあるように、地方官と胥吏が結託して様々な不正を働いたという。

実際に安化县差役の熊升が「勢いに依って民を虐げた」罪で処罰され¹²¹⁾、署巴陵県知県の王逢吉と門丁万五は飢饉のため放出した穀物の価格をつり上げたと訴えられた¹²²⁾。また安仁県戸書陳新發らや門丁謝一、邵陽県門丁蔣徳は錢糧の着服や恐喝、金を騙し取った罪で絞首刑や労役刑となり¹²³⁾、江華県知県劉興桓は門丁夏培元らが地元の紳士である徐琳らと結拜兄弟となり、広西姑婆山に行つて「賊匪と勾通」するのを止められなかったと告発された¹²⁴⁾。さらに郴州知州景星も科挙の試験に当たり、差役が有力者の子弟から賄賂を受けて不正を助けたのを見過ごしたと訴えられた¹²⁵⁾。

むろんこれらの案件の中には、財政難がもたらした構造的な矛盾や冤罪、誣告のケースも存在していた。だが一連の事件によって地方政府の力量不足が露呈し、実力行使の風潮が助長されたことは疑えない。張亮基は次のように述べている。

逆賊が跳梁して広西から湖南へ、湖南から湖北へ及んだが、しばしば官兵の剿辦を経て兇渠や偽目で生き残っている者は幾らもない。しかし毎回彼らが去った後に、盜賊がたちまち仲間を呼び集めて万人を超え、奸民が反乱しようと考え、従う者は帰するが如きである。わが国は相伝わること二百余年、その統治は寛大で手厚いことを重んじてきた。しかるに人々はいかなる恨みを抱いて天の大義に背き、どんな苦しみに逼られて殺戮を甘んじて受けようとするのだろうか？

およそ各州県は日頃の刑罰や政治が明らかでなく、不肖の民と良民を区別しない。会匪や盜賊、ゴロツキを放任し、事なかれ主義によって取り繕っている。ただ目先の安逸を貪るだけで、国家の大計を顧みない。次第に小さな災いが大きな災いとなり、ひとたび潰えれば最早事態は收拾できない……。湖南省ではこれまでも官吏を殺し、城を攻める事件が数回発生したが、逆党が通過した後は土匪が党羽を集めて機に乗じて事件を起こし、ほとんど全土にわたっている。これを改めるには吏治を清めなければ効果がなく、吏治を清めるには最も賢い者、愚かな者を選んでそれぞれ推薦、弾劾し、地方官たちの賞罰をはっきりさせなければならない¹²⁶⁾。

ここからは太平軍に呼応した勢力が硬直した清朝の地方統治に失望し、これを拒否しよう

と試みた人々であったことが窺われる。彼らはアヘンの密売業者や農民といった特定の職業に限定されない多様な人々であり、流動性の高い移民から一定の経済的基盤を持つ下層のエリートまでその出身も様々だった。むしろ彼らはそれぞれの社会関係の中で激しい競争と矛盾を抱えており、その故にこそ地方官や胥吏の「目先の安逸を貪る」政治に憤らずにはいらなかった。それは地方長官たちの不甲斐ない戦いぶりに憤慨し、解任を求めた体制派知識人の言説と共通する部分が少なくなかったのである。

1846年6月に湖北荊州では満洲族が集団で漢族の店舗を襲撃し、負傷者が出たことに怒った漢族が「罷市」即ちストライキに突入するという事件が発生した。元々八旗の駐屯地だった荊州では東側に満洲人が、西側に咸寧県、武昌から来た漢族商人が住んでいたが、両者の間には売買などをめぐってトラブルが絶えなかった。この月荊州で競渡レースが行われると、これを見物していた満漢双方のあいだで喧嘩が起こり、漢城内部の店舗が破壊された。その後旗人の間に「漢人が報復のため襲撃に来る」との流言が広がると、彼らは再び漢人を襲い、南門外の咸武会館を焼き払った。さらに満洲拳人の慶発は沙市鎮を襲撃せよと記したビラを配ったが、発見した満洲人官吏によって中止された¹²⁷⁾。

この事件は民族対立が尖鋭化していた19世紀の中国社会において、満洲族と漢族の関係も例外でなかったことを物語っている。むしろ満洲族が少なかった中国南部では、彼らと漢族の間の民族摩擦も他の少数民族のように顕在化した訳ではなかった。だが荊州の旗人たちが消費する食糧は漕米として湖北東部の各地で徴収された米であり、漕米の負担増加に対する不満は漢族の満洲族に対する憎しみを生み、両者の関係を緊張させる可能性を含んでいた¹²⁸⁾。

楊秀清と蕭朝貴の「天を戴いて胡を討つの檄」は、「満洲はまた貪官汚吏を放置して天下に瀰漫させ、人民の骨の髄までしゃぶり取らせている。天下の男女は路傍に声をあげて泣いている」「官職は賄賂によって得られ、刑罰は錢によって免除される。だから金持ちが権力を握り、豪傑は絶望している」¹²⁹⁾とあるように、腐敗した政治の原因を異民族統治に求めることで新王朝の正統性を主張した。それはユダヤ・キリスト教の不寛容による排他性という制約を抱えながらも、幅広い階層に訴えるという点では確かに効果的なメッセージであった。この故にこそ太平軍は湖南において下層のエリートを含む多くの人々をその隊列に加え、急速に勢力を伸ばすことに成功したのである。

小 結

本稿は湖南南部で活動していた太平天国を取りあげ、その勢力拡大が可能となった理由を地域社会の変容という視点から考察した。そして19世紀前半の湖南で活発だったのは天地会の影響を受けた青蓮教反主流派（金丹道）の活動であり、朱九濤問題で有名となった尚弟会のキーパーソンは左家発に入会を勧めた李丹であること、永安州から蜂起を促した彼の名前は郴州の劉代偉反乱にも登場するが、天徳王は反体制勢力の実態とは別のところで作り出

された漢人中心主義の表象に外ならないことを指摘した。

次に本稿は道州における太平軍について考察し、新たに加入した兵士たちの編制と食糧の確保に迫られたこと、江華県の攻撃に加わった反乱集団に対しては「貢献」によって略奪物の提出を強要し、彼らを厳しい統制下に置いたことを指摘した。また清軍の陣営においても食糧の不足は深刻で、姚瑩は速やかな攻撃を主張したが採用されなかったこと、和春と江忠源が立てた前後から太平軍を挟み撃ちにする作戦は清軍の緩慢な動きによって成功せず、道州を出発した太平軍はさしたる抵抗も受けずに湖南南部の要衝である郴州を占領したことを指摘した。

続いて本稿は太平軍の快進撃が可能となった要因として、程裔采に代表される地方長官の怯えた行動が清軍将兵の士気を失わせたことを挙げ、人材不足に悩む清朝中央の曖昧な処罰はかえって体制派知識人の憤激を招いたと述べた。また太平軍の進撃先で様々な反乱勢力が呼応した背景には、太平天国が派遣した工作員の活動があったことを指摘し、その例として東安県で発生した蔣璘、唐元亨反乱と広東韶州から長沙攻撃へ加わるように誘われた林二盛らのケースを取りあげた。

さらに本稿は太平天国の性質をめぐる宮崎市定氏と小島晋治氏の論争を再検討し、太平軍の主要な参加者をアヘン販売業者（秘密結社員）と見るにせよ、農民戦争と捉えるにせよ、それらは定着農耕民にこだわる日本人の固定観念（あるいはマルクス主義の公式）に囚われた議論であり、中国社会における流動性の高さを前提とした下層移民に対する視座が不足していたと述べた。

そして小島氏が検討した武岡州の阻米事件、耒陽県の抗糧暴動について檔案史料を手がかりに新たな分析を加え、そこで注目すべきは従来の科举エリートと異なる新興の地域リーダーの成長であると指摘した。また清朝の硬直した統治は彼らを活用できず、反政府的な行動へと追いやったばかりか、地方政府の腐敗が明るみになる程に自らの支配の正統性に疑問符をつけたと述べた。さらに湖南で太平軍に呼応した人々の清朝に対する失望は、地方長官の失態を告発した体制派知識人の言説と通じるものがあった。異民族統治こそが貪官汚吏による悪政の原因だと主張する太平天国の檄文は、その宗教的排他性にもかかわらず幅広い階層の人々を糾合する可能性を含んでいたのである。

このように考えると本稿が取りあげた 1852 年の湖南南部における活動は、その後の太平天国の歴史において重要な意味を持っていたことがわかる。それは単に多くの兵力を獲得し、辺境の反乱から全国的運動へと発展しただけに止まらない。この時湖南の地域社会が直面していた問題点は中国社会に共通するものであり、試行錯誤の中から編み出された太平天国の戦略と反満ナショナリズムの主張は、その攻撃性と相まって地方政府の腐敗に憤っていた多くの人々に影響を与えた。また鎮圧に当たっていた地方長官たちの相次ぐ失態は、体制派知識人たちの憤激と激しい批判を巻き起こした。

むろん太平天国が湖南にいかなる社会変容をもたらしたのかについては、なお検討すべき

課題が多く残されている。だが太平軍の通過後に曾国藩が湘軍の結成に乗り出し、その後の中国社会に大きな構造的変化を生み出したのは、この時太平軍が湖南社会に与えた衝撃の大きさから見て決して偶然ではなかったと言えよう。

湖南省の省都である長沙で攻防戦を展開し、さらに湖北へ向かった太平天国については別の機会に詳述することにした。

註

- 1) 菊池秀明『广西移民社会と太平天国』【本文編】【史料編】風響社、1998年。
- 2) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008年。
- 3) 菊池秀明「广西における上帝会の発展と金田団營」（『アジア文化研究』35号、2009年）。同「金田団營後期の太平天国をめぐる諸問題」（高知海南史学会編『海南史学』47号、2009年）。
- 4) 菊池秀明「永安州時代の太平天国をめぐる一考察」（『アジア文化研究』36号、2010年）。同「広東凌十八蜂起とその影響について」（未発表）。
- 5) 菊池秀明「太平天国の広西北部、湖南南部における活動について」（『アジア文化研究』37号、2011年）。
- 6) 簡又文『太平天国全史』上冊、香港猛進書屋、1962年。
- 7) 鍾文典『太平天国開国史』广西人民出版社、1992年。
- 8) 崔之清主編『太平天国戦争全史』1、太平軍興、南京大学出版社、2002年。また茅家琦主編『太平天国通史』南京大学出版社、1991年の該当部分も崔之清氏の執筆である。
- 9) 小島晋治『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、1978年。同「初期太平天国兵士十名の供述書」（『東京大学人文科学紀要』75、1982年（同『太平天国運動と現代中国』研文出版、1993年、85頁）。
- 10) 目黒克彦「咸豊初期団練の成立について——湘勇の母体として湘郷県の場合」『集刊東洋学』46号、1981年。同「王壮武公珍著「団練説」訳解」『愛知教育大学研究報告、社会科学』31号、1982年。同「団練と郷勇との関係について——湘郷団練と湘勇の場合」『愛知教育大学研究報告・社会科学』32号、1983年。
- 11) 谷家章子「清末、湖南省における反体制的活動についての一考察——「越境」する人々と「教」」駿台史学会編『駿台史学』134号、2008年。
- 12) 中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1-26、光明日報出版社および中国社会科学文献出版社、1990-2001年（以下『鎮圧』と略記）。
- 13) 光緒『郴州直隸州郷土志』卷上、兵事。
- 14) 張亮基奏、咸豊二年十二月二十六日『宮中檔咸豊朝奏摺』6、747頁、国立故宫博物院藏。また劉代偉反乱については程喬采奏、咸豊二年三月二十二日、軍機処檔083895号および同奏、咸豊二年四月初二日・十一日『宮中檔咸豊朝奏摺』5、654・658頁。なお同書は658頁分の上奏期日を取り違えており、軍機処檔に基づいて訂正した。
- 15) 汪堃『盾鼻隨聞録』卷1、粵寇紀略（中国近代史資料叢刊『太平天国』4、神州国光社、1952年、359頁）。また謝介鶴『金陵癸甲紀事略』附粵逆名目略は李巖通について「偽殿前侍衛、湖南人、郴州股匪、為官兵追剿、遂至永安附東賊」と述べている（『太平天国』4、676頁）。
- 16) 崔之清『太平天国戦争全史』1、451頁。

- 17) 張亮基奏、咸豐二年十二月二十六日『宮中檔咸豐朝奏摺』6、747 頁。
- 18) 羅爾綱「太平天国与天地会關係考実」『太平天国史事考（修訂版）』三聯書店、1985 年、34 頁。
- 19) 莊吉發「清代青蓮教的發展」『大陸雜誌』71-5 期、1985 年（同『真空家鄉——清代民間秘密宗教研究』文史哲出版社、2002 年、316 頁）。淺井紀『明清時代宗教結社の研究』研文出版、1990 年。武内房司「清末宗教結社と民衆運動——青蓮教劉儀順派を中心に」神奈川大学中国語学科編『中国民衆史への視座——新シノロジー・歴史篇』東方書店、1998 年、109 頁。譚松林主編『中国秘密社会』3、清代教門、福建人民出版社、2002 年、195 頁。秦宝琦『中国地下社会』2、晚清秘密社会卷、学苑出版社、2005 年、355 頁。なお周位掄の活動については李星沅奏、道光二十五年八月十六日『李文恭公奏議』卷 8。
- 20) 蔡少卿「太平天国革命前夕雷再浩和李沅發起義的幾個問題」北京太平天国史研究会編『太平天国学刊』2、中華書局、1985 年、350 頁。
- 21) 黄兆麟奏、咸豐元年七月二十一日、軍機處奏摺錄副、農民運動類、秘密結社項 8878-27 号、中国第一歴史檔案館蔵。
- 22) 四川は 1827 年に楊守一らの組織が摘発を受けた地で、程孔固らも四川人の王又名から青蓮教を学んだ。また徐澤醇奏、咸豐元年十一月十八日『鎮圧』2、532 頁によると、黄兆麟の上奏を受けて四川では峨眉山と万雲龍に対する調査が行われた。
- 23) 程喬采奏、咸豐元年九月二十七日『鎮圧』2、431 頁。「天書」とは周位掄が弥勒仏の「転世」であることを示すもので、宝剣は彼が悟りを開いた時に作った七星宝剣を指すと見られる（李星沅奏、道光二十五年三月十九日『李文恭公奏議』卷 7。また秦宝琦『中国地下社会』2、376 頁。
- 24) 程喬采奏、咸豐元年九月二十七日『鎮圧』2、431 頁。また洪秀全が金田団営前夜から太平王を名乗り、1851 年 5 月頃までに太平天国の国号を立てた点については菊池秀明「金田団営後期の太平天国をめぐる諸問題」を参照のこと。
- 25) 河鰭源治「天徳と太平王について」『論集・近代中国研究』山川出版社、1981 年、99 頁。
- 26) 徐広縉奏、咸豐元年十月二十六日『鎮圧』2、472 頁によると、香山県海中の孤島にある老万山の搜索が行われたが、朱九濤は発見出来なかった。また賽尚阿も太平軍の捕虜に対する取り調べでは「未聞有朱九濤之名」と述べている（賽尚阿等奏、咸豐元年九月二十三日『鎮圧』2、407 頁）。
- 27) 市古宙三「朱九濤考」『近代中国の政治と社会』東京大学出版会、1971 年、80 頁。また羅爾綱「朱九濤考」『太平天国史記載訂謬集』三聯書店、1985 年、61 頁。
- 28) 駱秉章奏、咸豐五年三月二十九日『宮中檔咸豐朝奏摺』12、180 頁。
- 29) 程喬采奏、咸豐元年九月二十七日『鎮圧』2、431 頁。
- 30) 洪大全供出湖南広東会匪名单、咸豐二年四月二十六日『鎮圧』3、244 頁。なおこのリストには台湾故宮博物院所蔵（軍機處檔 084219 号）、National Archives 所蔵（F.O. 931 1346 号）があるが、李丹に関する部分については同一内容である。
- 31) 張亮基奏、咸豐二年十二月二十六日『宮中檔咸豐朝奏摺』6、747 頁。
- 32) 張亮基奏、咸豐三年正月十八日『鎮圧』4、468 頁。その理由は明らかではないが、李丹の捜査が困難であると判断したためと推測される。
- 33) 鄧亜隆供、巫法貴供、F.O. 931 1375 号。
- 34) 耆英等奏、道光二十五年二月二十八日・同四月二十八日・同九月二十八日、軍機處檔 073446 号・074323 号・076028 号。
- 35) 徐広縉等奏、道光二十九年三月二十五日・同四月初十日、軍機處奏摺錄副、農民運動類、反清項

8895-36号・8895-47号。

- 36) 徐広縉等奏、咸豊元年三月二十六日・同十一月初九日『鎮圧』1、344頁・同書2、503頁。また広東広寧県から広西東部で活動した温大貨五反乱軍も王号や年号は提起していない（徐広縉等奏、咸豊元年十二月二十九日『鎮圧』2、601頁）。さらに1854年以後に広東で蜂起した天地会反乱は「大明嗣統」「太平」「洪徳」の年号を用いた（広東省文史研究館・中山大学歴史系編『広東洪兵起義史料』上、広東人民出版社、1992年、37-76頁）。これらの状況から見て、「天徳」が19世紀中葉の天地会系組織が多用した王号、年号という見方は成り立たないと思われる。
- 37) 河鰭源治「天徳と太平王について」。
- 38) 程番采奏、咸豊二年四月三十日『鎮圧』3、254頁。
- 39) 鄧亜隆供、F.O. 931 1375号。
- 40) 張徳堅『賊情彙纂』巻11、賊数、老賊（『太平天国』3、290頁）。
- 41) 『太平軍目』『太平天国』1、122頁。
- 42) 王慶成『『太平軍目』と太平天国軍制』『太平天国の歴史と思想』中華書局、1985年、217頁。同「『太平軍目』の歴史内容』『太平天国の文献と歴史—海外新文献刊布と文献史事研究』社会科学文献出版社、1993年、172頁。
- 43) 太平天国八年『太平礼制』『太平天国』1、111頁。洪天貴福供在南昌府供詞、中国近代史資料叢刊続編『太平天国』2、広西師範大学出版社、2004年、430頁。また羅爾綱『太平天国史』1、巻8、表第6、後期王爵人物表、2、天王諸子封王表、中華書局、1991年、359頁。
- 44) 『烏蘭泰函牘』巻下、『太平天国』8、702頁。
- 45) 程番采奏、咸豊二年六月初八日『鎮圧』3、374頁。
- 46) 姚瑩「請速進兵議」『中復堂遺稿統編』巻1。
- 47) 蔣光明供、F.O. 931 1375号。
- 48) 『賊情彙纂』巻10、賊糧、虜劫（『太平天国』3、271頁）。
- 49) 光緒『永明県志』巻32、武備志、兵事。
- 50) 『賊情彙纂』巻10、賊糧、貢獻（『太平天国』3、271頁）。
- 51) 巫法貴供、鄧亜隆供、F.O. 931 1375号。
- 52) 『天兄聖旨』巻2、庚戌年十一月初旬、続編『太平天国』2、305頁。また菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団営」。
- 53) 姚瑩「請速進兵議」『中復堂遺稿統編』巻1。
- 54) 『賊情彙纂』巻10、賊糧、貢獻（『太平天国』3、271頁）。
- 55) 勞崇光奏、咸豊二年六月初八日『鎮圧』3、382頁。また軍機大臣、咸豊二年六月十七日によると清朝は「現赴道州攻剿之兵勇、無論楚是粵、一切鹽糧仍由粵局供支」と命じていた（『鎮圧』3、396頁）。
- 56) 賽尚阿奏、咸豊二年五月二十五日・六月二十四日『鎮圧』3、351・426頁。軍機大臣、咸豊二年七月十五日、同書3、456頁。
- 57) 軍機大臣、咸豊二年七月十五日『鎮圧』3、456頁。また広西の負担軽減を求めた徐広縉の上奏（咸豊二年六月二十七日）は『鎮圧』3、429頁を参照のこと。
- 58) 姚瑩「請速進兵議」『中復堂遺稿統編』巻1。
- 59) 賽尚阿奏、咸豊二年五月十三日『鎮圧』3、364頁。
- 60) 賽尚阿奏、咸豊二年六月初二日『鎮圧』3、364頁。しかし劉長清は進撃を渋り、永明県の陥落を防げなかった罪で再び告発された（賽尚阿等奏、咸豊二年九月初四日『鎮圧』3、593頁）。

- 61) 程番采奏、咸豐二年五月二十五日『鎮圧』3、342 頁。
- 62) 蕭盛遠『粵匪紀略』（太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』1、中華書局、1962 年、26 頁）。
- 63) 賽尚阿等奏、咸豐二年七月初二日『鎮圧』3、430 頁。
- 64) 賽尚阿等奏、咸豐二年七月十四日『鎮圧』3、449 頁。
- 65) 『賊情彙纂』卷 11、賊数、老賊（『太平天国』3、290 頁）。
- 66) 黃非隆等供、F.O. 931 1375 号。
- 67) 汪堃『盾鼻隨聞錄』卷 2、湖南紀略（『太平天国』4、362 頁）。
- 68) 崔之清主編『太平天国戦争全史』1、491 頁。
- 69) 常大淳奏、咸豐二年七月二十日、軍機處檔 085533 号。
- 70) 江忠源「答劉霞仙書」『江忠烈公遺集』卷 1。
- 71) 民国『嘉禾県図志』卷 6、事紀篇、第三上。
- 72) 同治『桂陽直隸州志』卷 4、事紀。
- 73) 佚名「粵匪犯湖南紀略」『太平天国史料叢編簡輯』1、63 頁。また孫恩葆戦死の誤報については賽尚阿等奏、咸豐二年八月初一日『鎮圧』3、487 頁。
- 74) 軍機大臣、咸豐二年七月二十四日『鎮圧』3、469 頁。
- 75) 程番采奏、咸豐二年七月十七日『鎮圧』3、459 頁。
- 76) 駱秉章奏、咸豐二年四月二十二日『鎮圧』3、210 頁。
- 77) 程番采奏、咸豐二年四月二十三日『鎮圧』3、217 頁。なお彼によると、この時長沙の清軍兵力は 9,000 名であったという。
- 78) 程番采奏、咸豐二年六月初八日『鎮圧』3、378 頁。なお堅壁清野は清朝が雲貴総督吳文鎔の上奏を受けて実行を命じたものだった（軍機大臣、咸豐二年五月十一日『鎮圧』3、299 頁）。
- 79) 軍機大臣、咸豐二年六月十四日『鎮圧』3、390 頁。
- 80) 陸元娘奏、咸豐二年八月十四日『鎮圧』3、544 頁。
- 81) 諭内閣、咸豐二年五月初十日『鎮圧』3、296 頁。また龔裕奏、咸豐二年五月初十日、同書 3、296 頁。
- 82) 黎吉雲奏、咸豐二年七月二十五日『鎮圧』3、472 頁。
- 83) 諭内閣、咸豐二年七月二十四日『鎮圧』3、468 頁および軍機大臣、咸豐二年七月二十四日・八月初六日、同書 3、470・507 頁。
- 84) 奉旨、咸豐二年八月初二日『鎮圧』3、495 頁。
- 85) 諭内閣、咸豐二年八月初一日『鎮圧』3、485 頁および軍機大臣、咸豐二年八月十八日、同書 3、552 頁。
- 86) 軍機大臣、咸豐二年八月十二日『鎮圧』3、529 頁。
- 87) 龔裕奏、咸豐二年五月二十五日『鎮圧』3、552 頁。
- 88) 袁甲三奏、咸豐二年五月十四日『鎮圧』3、320 頁。
- 89) 賽尚阿等奏、咸豐二年八月初一日『鎮圧』3、487 頁。
- 90) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、中国社会科学出版社、1995 年、122 頁。
- 91) 『賊情彙纂』卷 11、賊数、新賊（『太平天国』3、294 頁）。
- 92) 賽尚阿等奏、咸豐二年八月十二日『宮中檔咸豐朝奏摺』5、603 頁および程番采奏、咸豐二年九月初四日・十六日、同書 5、711・811 頁。
- 93) 賽尚阿等奏、咸豐二年八月初一日『鎮圧』3、487 頁。軍機大臣、咸豐二年八月十二日、同書 3、

- 528 頁。諭内閣、咸豐二年九月初二日、同書 3、585 頁。葉名琛奏、咸豐二年十月初七日、軍機處檔 086885 号。同奏、咸豐二年十一月二十八日『鎮壓』4、168 頁。
- 94) 程喬采奏、咸豐二年九月初四日『宮中檔咸豐朝奏摺』5、711 頁。
- 95) 程喬采奏、咸豐二年正月二十六日『宮中檔咸豐朝奏摺』4、354 頁。駱秉章奏、咸豐三年九月二十五日、同書 10、566 頁。
- 96) 林二盛供、唐垂晚供、F.O. 931 1149 号、咸豐二年十一月。
- 97) 駱秉章奏、咸豐三年七月十八日『鎮壓』8、550 頁によると「(咸豐二年) 七月間、粵匪攻撲省城、有馬二素識之逆党李八遣令奸細李亨道、唐里芒潛來勾結、馬二向周輜愚等告知、周輜愚因見粵匪披猖、頓萌異志」という。
- 98) 徐広縉奏、咸豐二年十一月二十八日『鎮壓』4、166 頁。
- 99) 潘鐸奏、咸豐三年二月二十一日『鎮壓』5、310 頁。また同治『攸県志』巻 25、武功には「是年冬、齋匪何奇七、客匪黃極高接踪作乱」とあり、彼らが青蓮教と移民の反乱だったと述べている。
- 100) 賽尚阿等奏、咸豐二年七月十四日『鎮壓』3、449 頁。
- 101) 賽尚阿等奏、咸豐二年八月初一日『鎮壓』3、487・494 頁。羅繞典等奏、咸豐二年八月初三日同書 3、498 頁。
- 102) 宮崎市定「太平天国の性質について」『史林』48 巻 2 号、1965 (『宮崎市定全集』16、岩波書店、1993 年、75 頁)。
- 103) 小島晋治「揚子江中流域における農民の諸闘争と太平天国」「太平天国と農民」大塚史学会編『史潮』93・96・97、1965・1966 年 (『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、1978 年、83 頁)。
- 104) 小島晋治「太平天国運動の特質——ドイツ農民戦争と比較して」『太平天国運動と現代中国』131 頁。
- 105) 光緒『郴州直隸州鄉土志』巻下、要隘志、実業には「郴地南通交広、北達湖湘、為往来経商撥運之所。道、咸之世、海舶未通、南貨運北、北貨往南、悉由此經過、故沿河一帶大店棧房数十家、客貨至、為拔夫、為雇騾、為写船只、絡繹不絶、誠南楚一大冲要也。及東南氛靖、海運既通、百貨遂徙而之他。加以陸運濡遲、夫騾偷損、富商大賈悉視郴道為畏途。今昔比較、十一懸殊、河街店棧落落晨星、僅存数家、且有不能持久之勢」とある。これを見る限り郴州が衰退したのは同治年間のこと、賽尚阿らの上奏も「河面船隻甚多、一以資賊、貽害不淺」とあるように多くの船が行き来していたと伝えている (咸豐二年七月十四日『鎮壓』3、449 頁)。
- 106) G. William Skinner, "The Structure of Chinese history," *Journal of Asian Studies* 44(2), 1985. 瀬川昌久『中国社会の人類学——親族・家族からの展望』世界思想社、2004 年、145 頁。
- 107) 網野善彦「『瑞穂国日本』の虚像」『日本とは何か』日本の歴史 00、講談社、2000 年、237 頁。
- 108) 李尚揚供 (中国近代史資料叢刊続編『太平天国』3、広西師範大学出版社、2004 年、269 頁)。
- 109) 『賊情彙纂』巻 11、賊数、新賊 (『太平天国』3、294 頁)。
- 110) 吳其濬奏、道光二十三年六月初八日、軍機處奏摺録副、農民運動類、反清項 8931-45 号。陸費琮奏、道光二十三年九月初十日、同 8931-52 号。
- 111) 陸費琮奏、道光二十四年六月二十八日・八月初八日・九月初十日、軍機處奏摺録副、農民運動類、反清項 8931-14 号・8931-11 号・8931-24 号。また鄭星木等供、道光二十四年六月二十八日、同 8931-16 号。
- 112) 小島晋治「揚子江中流域における農民の諸闘争と太平天国」。
- 113) 陸費琮奏、道光二十四年九月十五日、軍機處奏摺録副、農民運動類、反清項 8931-26 号。ちなみ

- に太平天国の蜂起後、陽大鵬の子供が総制として北伐軍に加わっていたとの報告があり、楊秀清と陽大鵬の関係が疑われた（駱秉章奏、咸豐四年九月十一日『鎮圧』15、591頁）。
- 114) 曾如炷供、道光二十三年六月初八日、軍機処奏摺録副、農民運動類、反清項 8931-46 号。
- 115) 陽大鵬供、道光二十四年八月三十日、軍機処奏摺録副、農民運動類、反清項 8931-22 号。
- 116) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』第1章、37頁。
- 117) 吳榮光奏、道光十三年七月二十五日・十四年正月二十四日、軍機処檔 064817 号・067118 号。
- 118) 訥爾經額奏、道光十三年九月二十九日、軍機処檔 065589 号。
- 119) 程喬采奏、咸豐元年九月二十七日『宮中檔咸豐朝奏摺』3、413 頁。
- 120) 程喬采奏、咸豐元年八月十五日『宮中檔咸豐朝奏摺』2、736 頁。
- 121) 程喬采奏、咸豐元年十一月二十七日『宮中檔咸豐朝奏摺』4、1 頁。
- 122) 程喬采等奏、咸豐元年十二月初四日『宮中檔咸豐朝奏摺』4、43 頁。
- 123) 駱秉章奏、咸豐二年二月二十七日『宮中檔咸豐朝奏摺』4、556 頁。同奏、咸豐二年七月二十二日、同書 5、329 頁。
- 124) 駱秉章奏、咸豐三年八月二十三日『宮中檔咸豐朝奏摺』10、87 頁。
- 125) 駱秉章奏、咸豐元年二月十五日『宮中檔咸豐朝奏摺』1、287 頁。同奏、咸豐二年正月二十六日、同書 4、364 頁。
- 126) 張亮基奏、咸豐二年十二月二十六日『宮中檔咸豐朝奏摺』6、755 頁。
- 127) 裕泰等奏、道光二十六年六月二十一日・八月初六日『宮中檔道光朝奏摺』17、302・641 頁。
- 128) 汪志伊等奏、嘉慶十三年十月二十九日『宮中檔嘉慶朝奏摺』21、677 頁によると、1842 年に鍾人杰反乱が発生した崇陽県、通城県の漕米は、元々華北に輸送されていたが、1789 年からは荊州の倉庫に送られて、ここに駐屯する満洲旗人たちの「兵食」に充てられた。1846 年の事件は鍾人杰反乱と直接の関係はないが、漕米の徴収に対する不満が満漢関係を悪化させる要因となり得たことを示していると考えられる。
- 129) 『頒行詔書』『太平天国』1、162 頁（西順蔵編『原典中国近代思想史』1、1976 年、299 頁）。